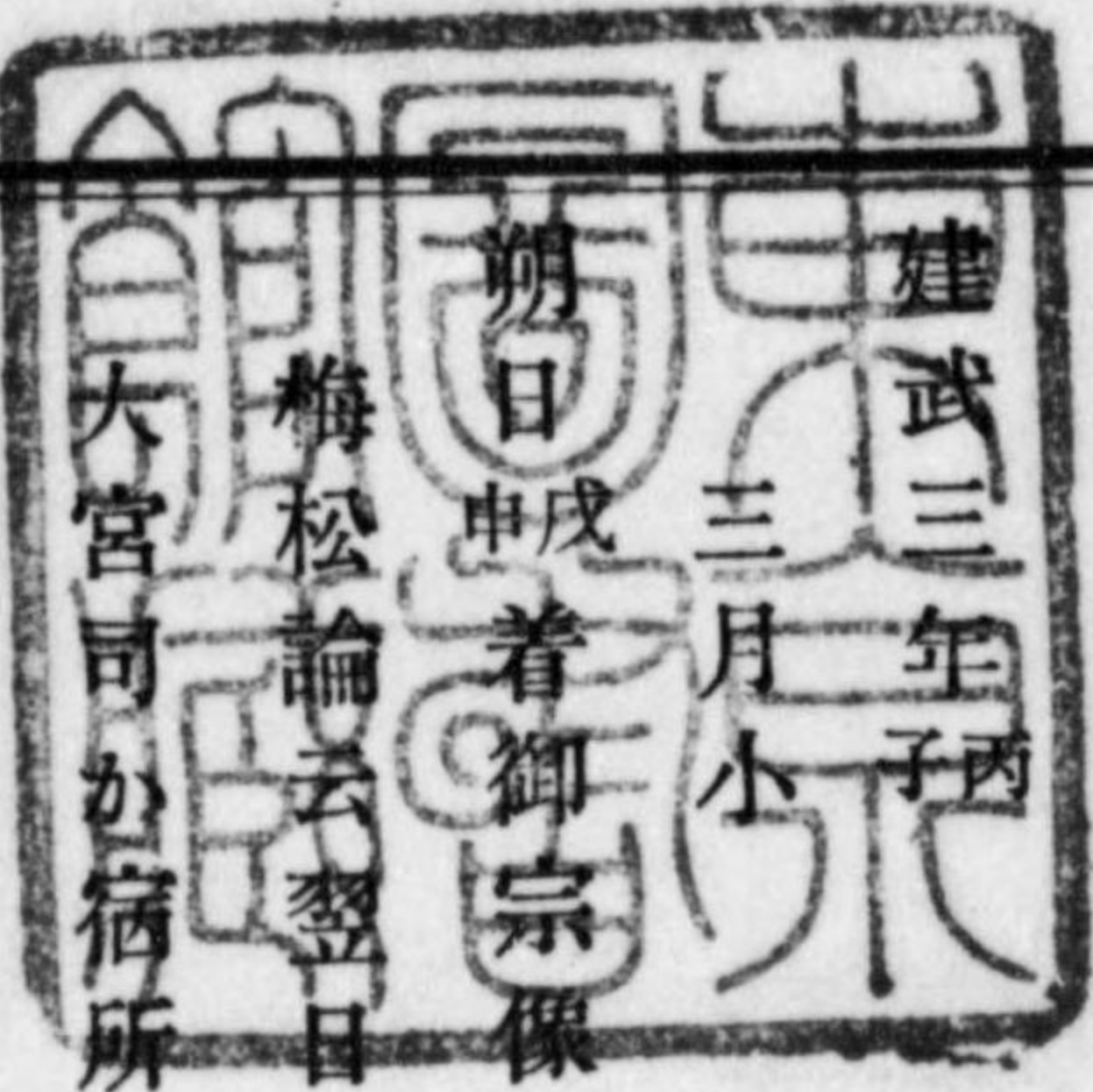


№ 20456 / 22

後鑑卷之十一

尊氏將軍記第四之四 建武三年三月



建武三年三月朔日  
大宮司が宿所へ酉刻に御着あり

武藤能登彦四郎貞廣戦死

當所にて妙恵か自害の事聞召定められてを御歎の色切に見へさせ給ひけるかゝる所に敵既に博多にひかへざるよし聞へし間其夜頼尙五  
十町御先に蓑尾濱といふ所に陣をとりさりければ頼尙一人宗像の御  
陣へ召きて合戦の事仰談せらまけるに頼尙申けるは先度宰府の戦の  
事は頼尙以下御迎に参したりし間無勢に依て討負候といへとも父の  
入道は國の案内者にて候間一身は定て無爲に候むか明日の合戦には





國人等必味方へ參へく候菊地武敏計は頼尙か一力を以て誅伐せむ事案の内にて候と事もかけに申ける其體誠に憑もしくろ見にける或人申けるは關東より供奉の輩命を奉るへき所存あるに馬ども兵庫に捨置間歩行にて今夜追付奉る事不定なり明日計御逗留ありて御先に立られて御合戦有へし打捨て御立は不便なりと衆議いまた定まらさりける所へ夜半はかりに菊地既に宰府を立て押寄るよし方々より注進申ける間後陣のともからの御沙汰にも及はキ

武藤系圖云貞廣能登彦四郎建武三年三月一日於坂付諸關原討死

二日酉己多々良濱合戦鎮西諸將多歸降者

大平記云少貳カ城既ニ攻落サレテ一族若黨百六十五人一所ニテ討レケレハ菊地彌大勢ニ成テ頓テ多々良濱へソ寄懸ケル將軍ハ香椎宮ニ取上テ遙ニ菊地カ勢ヲ見給フニ四五万騎モ有ラント見ヘテ夥シ御方ハ纔三百騎ニハ過ス而モ半ハ馬ニモ乘ス鎧ヲモ着ス此兵ヲ以テ彼大

敵ニ合ン事蚍蜉大樹ヲ動シ螻蛄隆車ヲ遮ルニ異ナラス怒ナル軍シテ云甲斐ナキ敵ニ合ンヨリハ腹ヲ切ント將軍ハ仰ラレケルヲ左馬頭直義堅ク諫申サレケルハ合戦ノ勝負ハ必シモ大勢小勢ニ依ヘカラス中先直義馳向テ一軍仕テ見候ハント申捨て左馬頭ハ香椎宮ヲ打立給へハ相從フ人々ニハ仁木四郎次郎義長細川陸奥守顯氏高豐前守師重大高伊豫守重成南遠江守宗繼上杉伊豆守重能畠山阿波守國清ヲ始トシテ大友嶋津曾我白石八木岡饗庭ヲ宗徒ノ兵トシテ都合其勢二百五十騎三萬餘騎ノ敵ニ懸合ント心サシテ命ヲ塵芥ニ思ケル心ノ程コソヤサシケレ直義既ニ旗ノ手ヲ下シ社壇ノ前ヲウチ過給ヒケル時鳥一番杉葉ヲ一枝クハヘテ兜ノ上ニソ落シケル左馬頭馬ヨリ下テ是ハ香椎宮擁護シ給フ瑞相ナリト敬禮シテ射向ノ袖ニ差レケル敵御方相近付テ関ヲ揚ントシケル時大高伊豫守重成ハ將軍ノ御陣ノ余ニ無勢ニ候へハ歸參候ハントテ引返ケリ直義此ヲ見テ始ヨリコソ留ルヘキニ敵



ヲ見テ引返スハ臆病ノ至ナリ哀ハレ大高カ五尺六寸ヲ五尺切テ捨テ  
剃刀ニセヨカシトテ欺レケル去程ニ菊池五千餘騎ヲ率シ濱ノ西ヨリ  
相近付テ先矢合ノ流鏑ヲソ射タリケル左馬頭ノ陣ヨリハ矢ノ一筋ヲ  
モ射ス鳴ヲ靜メテ透間アラハ切懸ント伺ヒ見給ヒケルニ誰射ルトモ  
知ス白羽ノ流鏑矢敵ノ上ヲ鳴響テ落所モ見ヘス左馬頭ノ兵共是只事  
ニ非スト憑シク思ヒ勇ヲナサスト云者ナシ兩陣相挑テイマタ兵刃ヲ  
交ヘサル處ニ菊池カ兵黄河原毛ナル馬ニ火威ノ鎧着タル者唯一騎御  
方ノ勢ニ三町餘先立テ拔懸ニソシタリケル爰ニ曾我左衛門白石彦太  
郎八木岡五郎三人共ニ馬物具モ無テ眞前ニ進タリケルカ是ヲ見テ白  
石立向テ馬ヨリ引落サント手モト近ク寄副ケレハ敵太刀ヲ捨テ腰刀  
ヲ拔ント一ソリ反ケルカ眞倒ニ成テ落ニケリ白石是ヲ起シモダテス  
押ヘテ首ヲ搔テケリ馬ヲハ曾我走寄テ打乘鎧ヲハ八木岡剝取テ着タ  
リケリ白石カ高名ニ二人利ヲ得ヤカテ三人共敵ノ中ヘ打入ハ仁木細

川以下御方討スナ續ケヤトテ大勢ノ中ヘ懸入テ亂合テソ鬪合テソ鬪  
ヒケル仁木越後守ハ近付敵五騎斬テ落シ六騎ニ手負セテ猶敵ノ中ニ  
有ナカラ仰タル太刀ヲ踏直シテハ切合命ヲ限トソ見ヘタリケルサレ  
ハ百五十騎參然トシテ堅ヲ破レハ菊池カ勢誠ニ百倍セリトイヘトモ  
僅ノ小勢ニ懸立ラレテ一陣ノ軍兵三千餘騎多々良濱ノ遠干瀉ヲ二十  
餘町マテソ引退ケル搦手ニ廻リケル松浦神田ノ者共將軍ノ御勢ノ纒  
ニ三百餘騎ニモ足サリケルヲ二三萬騎ニ見ナシ磯打浪ノ音ヲモ敵ノ  
関ノ聲ニ聞ナシケレハ俄ニ叶ハシト思フ心付テ一軍ヲモセス旗ヲ捲  
兜ヲ脱テ降人ニ出ニケリ菊池是ヲ見テ彌難儀ニ思ヒ大勢ノ懸ラヌ先  
ニト急キ肥後國ヘ引返ス將軍則一色太郎入道道猷仁木四郎次郎義長  
ヲ差遣シ菊池カ城ヲ攻サセラル、ニ一日モ堪ヘ得ス深山ノ奥ヘ逃籠  
ル是ヨリ聽テ同國八代城ヲ攻テ内河彦三郎ヲ追落ス此ノミナラス阿  
蘇大宮司八郎惟直ハ先日多々良濱ノ合戦ニ深手負タリケルカ肥前國



小杵山ニテ自害シ又其弟九郎ハ知ヌ里ニ行迷テ卑シキ田夫ニ生虜レ  
ヌ秋月備前守ハ太宰府迄落タリケルカ一族二十餘人一所ニテ討レニ  
ケリ是等ハ皆一方ノ大將トモナリ又九州ノ強敵トモナリヌヘキ者ナ  
リシカ天運時至ラサレハ加様ニ皆滅サレニケリ爾ヨリ後ハ九國二嶋  
悉將軍ニ附從ヒ奉ラスト云者ナシ此全ク菊池カ不覺ニモ非ス又直義  
朝臣ノ謀ニモ依ス只將軍天下ノ主ト成給フヘキ過去ノ善因催シテ靈  
神擁護ノ威ヲ加ヘ給ヒシカハ不慮ニ勝コトヲ得テ一時ニ靡キ從ケリ  
今マテ大敵ナリシ松浦神田ノ者共將軍ノ小勢ヲ大勢ナリト見テ降人  
ニ參タリト其聞有ケレハ將軍高上杉ノ人々ニ向テ宣ケルハ言ノ下ニ  
骨ヲ銷シ笑ノ中ニ刀ヲ礪ハ此比ノ人ノ心ナリサレハ少貳カ一族共カ  
多年ノ恩顧ナリシカ共正シク少貳ヲ討ツルモ遠カラヌ様ソカシ此ヲ  
見ルニモ松浦神田如何ナル野心ヲ挾テカ一軍モセス降人ニハ出タル  
ラン信心眞アル時ハ感應不思議ヲ顯ハス事アリ今御方ノ小勢ヲ大勢

ト見シ事不審無ニ非ス相構テ面々心許シ有ヘカラスト仰ケレハ遙ノ  
末座ニ候ケル高駿河守進出テ申ケルハ誠ニ人ノ心ノ測リカタキ事ハ  
天ヨリモ高ク地ヨリモ厚シト申セ共加様ノ大儀ニ於テハ餘ニ人ノ心  
ヲ御不審有テハ争カ早速ノ大功ヲ成候ヘキ就中御勢ノ多見ヘテ候ケ  
ル事例ナキニモ有ヘカラスト

梅松論云三月二日辰刻ニ宗像の御陣を御立有て御向あり五六里許御  
過有けり未刻許に香椎宮の御寶前を過させたまふ所に神人等杉枝を  
折持て申けるは敵は皆篠の葉を笠驗に着て候是は味方の御笠驗なる  
へしとて兩大將より始奉りて軍勢の笠驗にそ着させける奇瑞まこと  
にめて度う見へし殊に當社は新羅征伐の昔神功皇后椎木に御手を觸  
られてけるに依て香はしかりし故香椎宮と申なり此故に當社椎木を  
以て神體に比し杉木を以て御室とせり然るに淨衣着さりし老翁直に  
將軍の御鎧の袖に杉葉を指奉りければ自御刀をそ賜ける後に御たつ



ねありしに神人等更に知さる由申ければ是は神の御加護化人を遣されけるかと彌御頼母敷思召されければ軍勢共勇のいろをう顯はしける去程に當所を御過有て赤阪といふ所に打臨て御覽しければ多々良濱とて五十町の干潟あり南のはつれに小川ひとつ流さり宮崎の八幡宮は四方一里の松原あり南は博多東は二三里を去て山有西は海遠して唐をう限りける御陣は赤阪と松原の間沙玉を敷けることと敵は小川を越て松原を後に當て北よ向て控さり其勢六萬餘騎と聞へたり味方の先陣は高越後守師泰並京都より供奉の人々大友嶋津千葉大隅守宇都宮彈正少弼三百餘騎にて大手に向て控さり東の手さきは太宰少貳頼尙五百餘騎皆馬より下り立て支たり都合御勢千騎には過さりける懸所に頼尙は黃威の腹巻に同毛のつま取たる袖附てう着たりける是は先祖武藤小次郎資頼文治五年の恩賞に頼朝より賜たる當家重代の鎧ときこへけるを着て兜の緒をしめて小長刀を抜黒駁なる馬に

騎て只一騎兩大將の御前に參て申けるハ敵は大勢にて候得共皆味方に參へき者共なり菊池計は三百騎には過へからそ頼尙御前にて命を捨候は、敵は風前の塵あるへし急御旗を進らるへしと申ければ誠に頼もしく見へし尤兩大將御向有へき事然るへき由衆議一同にう申ける將軍其日は筑後入道妙慧か頼尙を以て進上申さりと赤地の錦の直垂唐綾の御鎧に御劔二あり一は御重代の骨食なり重藤の御弓に上矢をさゝる御馬は黒糟毛是は宗像大官司か昨日進上申たりしなり當日は御重代の御鎧御小袖と申を勢田の野田大官司に着せらる凡御當家戦場の御出立條々秘説あり昔將軍頼義貞任を征伐の時自手を碎き十二年か間暗き夜雪の中にも戦し程に馳合ん時必誤有へしとて清原武則う計ひとして將軍に七印といふ七のしるしを附奉るみな武具の内には有なり輒く知人有へからす今日は七までは無りしう共佳例に任て少々御心掛られけると承る將軍仰られけるは遼遠の境まで下向



本意に非すといへども進み退くは軍の法なり珍らしき敵に合て最期の合戦未練ならば當家累代の武畧を失ひまた當國に弓矢の瑕を残すよ非すや甚以思慮あり我等一所にむかつて合戦難儀に及ぶ事あらは何の頼あつて殘黨全からん一騎なりとも尊氏此陣にふまへなは先陣の勢力を得て戦へし若合戦利なくは馬廻りの武者共召具して入替て對治を致へし先頭の殿向はるへきよし仰出されければ此御意諸人の及はさる所ありとて稱美申さぬ者を無りける去年宮根を過足柄へ御向有て打勝たまひしも將軍の武畧に依まりとて御旗を進らる頭の殿は同妙慧か進らせりける赤地の錦御直垂よ紫革威の御鎧御劔ハ篠作弓矢をも帶せらる御馬ハ栗毛是も昨日宗像大官司か進上申たりしにそ召れける關東より供奉の輩皆歩行なりしかとも我劣らしと進みける中にも曾我上總介師資練貫の小袖の上よ赤糸鎧の菱の縫めより切捨たるに四尺餘なる太刀二振帶て白木の弓の大きなるに拾矢二三

十取差たるを貢ひ兜の緒をしめて御馬の先に立たりし事の體人には替て見へし御旗の下には仁木右馬助義長黃威の鎧をう着りける是ハ宗像の大官司か下御所に進らせたるを賜はり時に取て面目とる覺へし栗毛なる馬に乗て大手に向て進む處に敵少貳か勢の向たる東の手さきより先二三萬騎も有らんと見へて拔連て関を作り頼し懸て驅ける勢如何なる鬼神もさまるまじとは見へたりける然とも味方少も騒かそして先歩行なる武者共矢を射けるよ敵暫こらへし處へ透もあらせむ懸入折節北風塵沙を吹上しかは敵迷惑して漂けるを見て大手の御勢も同揉合て爰を限りとる闘ひけるかゝりける處に曾我上野介敵を討首を取臆て月毛ある大馬に乗て頭の殿の御前に參て分取見參に入さりけれハ御感斜ならず師資好馬得り千騎萬騎にもむかうへしとて又懸入ける體實よ一人當千とるみへし仁木義長は眞前に懸入て身命を捨て戦し間敵多斬落し鎧も馬も血に染てろ控さる味方勝に



乗て箱崎の松原を追過て博多の須濱までを攻詰たる去程に敵國の勢ともハ立も歸らきひた引に散々に成し處に菊池武敏計取て返して今日をかきりと攻戦ひし程に味方難儀に見へしか松原の内外東のはつれより二手にて引て來る處に下御所少も御驚なくして御旗を能差と仰られて御使を以て後陣の將軍へ御申ありけるハ直義ハ此にて御戰て御命に替るへし此隙を以て長門周防にも推渡して御身を全して御本意を達せらるへしとて錦の御直垂の右袖を解て進らせられしを見奉る人々皆涙をう流しける是に就ても勇士共はいよく思ひ切てを見へし懸りける處に敵古ひたる錦旗を差て三百騎許にて靜々と松原の北のはつれを打出て小川を渡さむとしける處に千葉大隅守か旗差只一騎川を渡されしと打入けるを見て敵支て控へたりし處に將軍御旗をさゝせ先立て引たりし勢共を召具して後より関を作り喚叫て懸けるを見て頼尙今ころ大將軍の御向候へと申ければ頭の殿御太刀をぬ

き馬の足を出さんとし給ひし間兵共我先にと義長師資を始として懸りける去程に川を中にへたて、時をうつす處に少貳か宗徒の家人饗庭の彈正左衛門尉赤革の肩白の鎧に月毛なる馬に乗て少貳に向て申けるは爰は討死あるへき所にて候へは御先に立候とて川を渡すを見て饗庭か子黒革の鎧着て黒き馬に乗けるか續て渡し敵の中へ懸入て散々に討合けるを見てこれを討せしと味方大勢續て攻戦しほとに菊池打負て落さりけり饗庭父子數ヶ所手を負といへとも存命子細無りけり懸けるほとに御上洛の後天下安危の合戦の忠節をは饗庭彈正左衛門尉いたしたりとて下御所より御刀を下しさまはりしこそ面目なれ去ほどに當所の軍破れしかハ酉刻なりしにやかて頭殿ハ少貳を召具して敵の跡を攻て今夜亥刻はかりハ宰府に御着ありて先妙惠か館の灰燼となりしを御覽せられて御愁歎のいろ切なりけり今日御合戦に打勝たまひし御事は併將軍の御武畧より出たりとていよく



憑しく見奉りし去程に御陣は宮崎の寺にてありしに當社の司官等賞翫したてまつること限なし御奉幣の義は合戦の觸穢の間ハ、かりあるへしとて御行水ありて廻廊の前にて八幡宮を拜し奉りたもふ吉良殿の進られし四目結の白き御劔を寶前に納らる則寄附の地あるへしとて御文章の爲に社家の古文を召出されし中にむかし鎮西八郎爲朝寄附の状ありしを御覽せられて當家の祖神實にありかたく思召て御社頭に向て合掌ありて御敬信淺からそこを見へたまひし

結城系圖云朝祐五郎左衛門尉建武三年四月十九日於多々良濱討死號松源寺殿法名寂圓

秋月系圖云種道筑前權守建武三年九州多々良濱合戦爲官方没落自害

三日<sup>庚戌</sup>太宰府御着陣 相馬彌次郎光胤捧着到狀

梅松論云三月三日下御所より少貳か一族武藤豊前次郎を御使として將軍に御申ありけるは昨日合戦に勝事更に人力にあらす實に神の御

加護と覺へてめてとし同酉刻許に宰府の原山に打上りし時分降參の仁數輩馳參す是は頼尙執申所なり當所に光臨を俟奉るといへども先啓せしめ候と御申あり宮崎と宰府の間五里と聞へし午刻に將軍原山の一坊に御着ありて兩御所御對面ありけり一昨日降參の者共を以て御門を守護せさせられけるこそめてたけれ御對治の事は御案の内  
に思召れざる御事なれども急々誅罰ありけるハひたそら太宰少貳頼尙か忠と聞へける去程に當所にて妙慧か最期の舉動同子共一族家人等命を捨ける次第御心靜に尋聞召れて御愁歎切なりし御事は亡魂も如何計か忝く見奉らん親類共ハ申に及はず諸將にいたるまで此君に命を捨ん事露計も惜からずとて皆涙を流しける下御所は妙慧か忌中暫ハ御別行あるへしとて人の聲高きをも堅く御誠有て御落涙のみにて御座ありし上意の趣どもを頼尙承て種々の馱餉を持參せしめ申上て云君の御爲に命を奉る者昔を聞にも三浦介義明狩野介義光佐



奈田與一義貞以下數輩なり亡父妙慧一人にかきらそ不便の御意ハ面  
目是にすくへからそといへとも片時も菊池武敏御誅伐の事如何にも  
急かるへく候とて自ら魚鳥を捧奉りて御酌まで申ける間是非よ及は  
そ其夜御酒宴有て後ろ人々に御對面もありける則一色禪門仁木右馬  
助兩大將として九州の輩松浦黨を先として肥後の菊池へ發向そ彼城  
に於て散々に合戰をいたし半月の内に攻落されしかは九國の間に殘  
る凶徒ろ無りける

歷代鎮西要畧云三月三日直義朝臣遣使尊氏將軍于箱崎賀合戰之勝利  
日利運更非人力之所及依神明之加護乎云々小貳頼尙遣豐前次郎今日  
午刻大將軍入宰府主原山一坊昨日爲寇讎今爲臣僕御軍門降參之軍兵  
殆五六萬也於是將軍下令曰

勳功賞事

右武士以下緇素貴賤不論其人於致合戰百忠輩者本所帶本所等安堵

之外可有不時之恩賞其功及子孫可令永代相傳之條勿論也又戰場墮  
命者其子孫妻妾親類郎從等中雖爲何仁其器用宛賜所領可令繼其跡  
云々

相馬文書載

相馬彌次郎光胤申

右奉屬大將 斯波殿御手親父重胤間爲 責上鎌倉致度々合戰忠之

處任 斯波殿 書並親父重胤事書今月八日令下國成 族等押寄猶

令對治候乎仍小高城楯籠着到次第不同

相馬九郎胤國 同子息九郎五郎胤

同與一胤房 相馬七郎時胤

同五郎顯胤 相馬孫次郎行胤

相馬六郎長胤 同七郎胤春

相馬十郎胤俊 同五郎泰胤



相馬孫次郎綱胤

同小次郎胤時

同四郎良胤

相馬小次郎胤政

新田左馬亮經政

相馬五郎胤經

同又五郎胤泰

同孫六胤家

相馬孫六郎盛胤

相馬孫九郎胤通

相馬小次郎胤顯

同孫四郎胤家

相馬孫次郎胤義

同小次郎胤盛

相馬孫五郎長胤

相馬又五郎朝胤

相馬孫七郎胤廣

相馬九郎次郎胤直

相馬滿丸

相馬千代丸

相馬小五郎永胤

相馬辨房圓意

相馬彥次郎胤祐

相馬彌次郎實胤

相馬又七胤貞

相馬小四郎胤繼

武石五郎胤通

伊達與一高景

同與三光義

相馬禪師房妙圓

相馬道雲房胤範

標葉孫三郎教隆

長江與一景高女子代筵田三郎光胤

相馬松王丸

相馬助房家人青田孫左衛門尉祐胤

右着到如件

建武三年三月三日

惣領代子息彌次郎光胤

進上 御奉行所

承了判

四日辛亥西國諸勢蜂起多應左武衛依此勅命新田義貞追罰西國此日先陣江

田兵部大輔行義大館左馬介氏明發途

太平記云丹波國ニハ久下長澤荻野波々伯部ノ者共仁木左京大夫賴章

ヲ大將トシテ高山寺ノ城ニ楯籠リ播磨國ニハ赤松入道圓心白旗峯ヲ



城郭ニ構テ討手ノ下向ヲ支ントス美作ニハ菅家江見弘戸ノ者共奈義能仙菩提寺ノ城ヲ拵テ國中ヲ掠メ領ス備前ニハ田井飽浦内藤頓宮松田福林寺ノ者共石橋左衛門佐ヲ大將トシテ甲斐河三石二箇處ノ城ヲ構テ船路陸路ヲ支ントス備中ニハ庄眞壁陶山成合新見多地部ノ者共勢山ヲ切塞テ鳥モ翔ラヌ様ニ構ヘタリ是ヨリ西備後安藝周防長門ハ申ニ及ハス四國九州モ悉附テハ叶フマシカリケレハ將軍方ニ志ナキモ皆從靡カスト云事ナシ中新田左中將義貞ニハ十六箇國ノ管領ヲ許サレ尊氏追討ノ宣旨ヲソ成レケル義貞綸命ヲ蒙テ既ニ西國ヘ立ントシ給ヒケル刻瘡病ノ心地煩シカリケレハ先江田兵部大輔行義大館左馬助氏明二人ヲ播磨國ヘ差クダサル其勢二千餘騎三月四日京ヲ立テ云々

五日壬子菊池武敏以下誅伐事被仰下於櫛宿一族中及小禰寢郡司一族中被賞戰功給御書於三崎三郎次郎政高

嶋津文書載

菊池武敏以下凶徒等誅伐之事可致軍忠狀加件

建武三年三月五日

御判

櫛宿一族中

肝付八郎兼重事馳向大隅國之境致用意可待大將下向之狀如件

建武三年三月五日

尊氏御判

小禰寢郡司一族中

集古文書載

出雲國大野庄内國守名地頭三崎三郎次郎政高於御方抽合戰半々條尤以神妙於京都有其沙汰之狀如件

建武三年三月五日

御判

六日丑癸播州室山合戰 此日令修故少貳入道妙惠追養給太平記云行義氏明同六日書寫坂本ニ著ニケリ赤松入道是ヲ聞テ敵ニ



足ヲタメサセテハ叶フマシトテ備前播磨兩國ノ勢ヲ合テ書寫坂本へ推寄ケル間江田大館室山ニ出向テ相戰フ赤松軍利無シテ官軍勝ニ乘シカハ江田大館勢ヲ得テ西國ノ對治輒カルヘキ由頻ニ羽書ヲ飛セテ京都へ注進ス

播磨鑑云室山城主ハ室小四郎某居ス文治ノ頃源義經八嶋合戰ニ八十  
六騎ノ内討死ス其後室小次郎某建武ノ頃室明神ノ社領一万石ヲ押領  
シ尊氏將軍是ヲ追伐シ跡斷絶スト云其後赤松左馬介則賴居ス建武三  
年二月尊氏京合戰ニ打負西國へ没落ノ時圓心則祐ハ白幡ノ城ニ籠リ  
信濃守範資一千餘騎ヲ率シ此處ヲ守ル義貞ノ一族江田大館ハ一萬餘  
騎ヲ率シ尊氏ヲ追テ同年三月六日書寫坂本ニ着ス範資室山ニ有ト聞  
ヨリ此處ニ押寄セ兩軍勵ミ戰フトイヘトモ赤松討負赤穗ノ方へ退ク  
其後浦上七郎行景此處ヲ守ル

歷代鎮西要畧云六日將軍親詣安泰院在宰府修妙惠性靈之追善且以筑前

國小田郷在夜須部永寄安養院爲性靈之菩提料田言

諷誦文曰

敬請諷誦之事 三寶泉僧御布施

右志者妙惠禪門幽靈建武第三之仲呂晦日依與義兵相代尊氏合發亡  
卒早因茲弟子每憶彼思々其志所拭哀淚催悲歎也就中幽靈平生之時有  
契約旨然間迎初七日之忌辰所鳴三箇之逸韻也加之爲每日佛事料而  
寄永代僧食一村畢然者聖靈酬此追修證九品之果恠可救六趣之頸仍  
諷誦所唱如件

建武三年三月六日

弟子源朝臣尊氏敬白

八日卯乙以豐前國河崎庄被寄筑前國一宮

筑前國續風土記引住吉社家所藏文書載

寄進筑前國一宮

豐前國河崎庄也



右今度之義兵遂本望祈天下之安寧家門繁昌所寄進如件

建武三年三月八日

源朝臣御判

十一日戊午伊豫國御家人祝彥三郎安親及播磨國人本田左衛門久兼捧軍功

申文

集古文書載

伊豫國御家人祝彥三郎安親申當國凶徒追罰事引率合田彌四郎具遠數多人勢楯籠松崎城之間屬當御手自去二月十七日抽晝夜軍忠同十九日寅刻仁責落畢彼凶徒等引籠由並之城之由依聞及重馳向彼所燒拂城郭了將又今月八日馳向杣田彌太郎光宗之館燒拂之同九日押寄河內彥太郎入道宗性之館令破却畢仍此段御檢知之上者且預御注進且賜御證判可備向後龜鏡候以此旨可有御披露候歟恐惶謹言

建武三年三月十一日

越智安親

進上 御奉行所

承了 判

嶋津文書纂載

本田左衛門尉久兼軍忠事

右屬干島津上總前司入道道鑑之手去年正月廿七日賀茂河原合戰之時致先懸被切殺乘馬同廿八日於神樂岡之下及散々之合戰處打取御敵三人了同卅日二條大宮並西七條合戰之時致軍忠之女第下野六郎同七郎被見知之間御尋之時不可有其隱然早浴恩賞彌向後欲抽軍忠仍恐々言上如件

建武三年三月十一日

承了 判

十三日庚申依賜義貞誅伐院宣可從一色右馬入道指揮旨被仰下於野上次郎三郎許 自此日攻筑後黑木城 狩野文書載



新田右衛門佐義貞與黨誅伐事所被下院宣也差遣一色右馬助入道於豐後國高勝寺之城畢隨彼催促可抽軍忠狀如件

建武三年三月十三日

尊氏御判

野上次郎三郎殿

歷代鎮西要畧云十三日將軍之軍攻筑後黑木城不日破之菊池武敏逐電其後復菊池蜂起玖珠城

十五日壬戌依京師御進發可抽忠戰由被命嶋津忠兼及大友大炊助 此頃新

田義貞率大軍責赤松圓心所籠播州白旗城

嶋津文書載

新田義貞黨類等爲誅伐之近日京都可有發向之一族相共可被致合戰之忠也仍執達如件

建武三年三月十五日

左近大夫將監判

島津周防五郎三郎殿

古證文載

玖珠城凶徒誅伐事相催一族屬于右馬助入道手可致軍忠之狀如件

建武三年三月十五日

尊氏御判

大友大炊助殿

太平記云去程ニ左中將義貞ノ病氣能成テケレハ五萬餘騎ノ勢ヲ率シテ西國ヘ下リ給フ後陣ノ勢ヲ埃汰シ爲ニ播磨國賀古河ニ四五日逗留有ケル程ニ宇都宮治部大輔公綱紀伊常陸介菊池次郎武季三千餘騎ニテ下着ス其外攝津國播磨丹波丹後ノ勢共思々ニ聘參シケル間程ナク六萬餘騎ニ成ニケリサヲハ聽テ赤松カ城ヘ寄テ攻ヘシトテ班鳩宿迄打寄給タリケル時赤松入道圓心小寺藤兵衛尉ヲ以テ新田殿ヘ申サレケルハ圓心不肖ノ身ヲ以テ元弘初大敵ニ當リ逆徒ヲ攻退候シ事恐ハ第一ノ忠節トコソ存候シニ恩賞ノ地降參不義ノ者ヨリモ猶賤シク候シ間一旦ノ恨ニ依テ多日ノ大功ヲ捨候キ去ナカラ兵部卿親王ノ御恩



生々世々忘難ク存候へハ全ク御敵ニ屬シ候事本意トハ存セス候所詮當國ノ守護職ヲタニ給旨ニ御辭狀ヲ副テ下シ賜リ候ハ、元ノ如ク御方ニ參テ忠節ヲ致スヘキニテ候ト申タリケレハ義貞是ヲ聞給ヒテ此事ナラハ仔細アラシト仰ラレテ聽テ京都へ飛脚ヲ立守護職補任ノ給旨ヲソ申成レケル其使節往反ノ間已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ圓心城ヲ拵スマシテ當國ノ守護國司ヲハ將軍ヨリ賜リテ候間手ノ裏ヲ返ス様ナル給旨ヲハ何カハ仕候ヘキト嘲哂シテコソ返サレケレ新田左中將是ヲ聞給ヒテ王事豎コトナシ縱恨ヲ以テ朝敵ノ身トナルトモ天ヲ戴テ天命ヲ欺ンヤ其儀ナラハ爰ニテ數月ヲ送ルトモ彼カ城ヲ攻落サテハ通ルマシトテ六萬餘騎ノ勢ヲ以テ白旗城ヲ百重千重ニ取圍テ夜晝五十餘日息ヲモ繼ス攻タリケル懸リケレ此城四方皆嶮岨ニシテ人ノ上ルヘキ様モナク水モ兵糧モ澤山ナル上播磨美作ニ名ヲ得タル射手共八百餘人マテ籠リタリケル間攻レトモ攻レトモ只寄手手負討ル

、計ニテ城中恙ナカリケリ脇屋右衛門佐是ヲ見給テ左中將ニ向テ申サレケルハ先年正成カ籠リタリシ金剛山城ヲ日本國ノ勢共カ攻兼テ結句天下ヲ覆サレシ事ハ先代ノ後悔ニテ候ハスヤ僅ノ小城一ツニ取カ、リテソ、ロニ日數ヲ送り候ハ、御方ノ軍勢ハ皆糧ニ疲敵陣ノ城ハ彌強ク候ハンカ其上尊氏既ニ築紫九箇國ヲ平ケテ上洛スル由聞ヘ候へハ彼カ近ツカヌ前ニ備前備中ヲ退治シテ安藝周防長門ノ勢ヲ屬ラレ候ハテハユ、シキ大事ニ及候ヌトコソ覺候へ去ナカラ今迄攻カ、リタル城ヲ落サテ引ハ天下ノ嘲共成ヘク候へハ御勢ヲ少々殘サレ自餘ノ勢ヲ船坂へ差向ラレ先山陽道ノ路ヲ開テ中國勢ヲ附推テ筑紫へ御下リ候へカシト申サレケレハ左中將此議尤宜覺候トテ聽テ宇都宮ト菊池カ勢ヲ差副伊東大和守頼宮六郎ヲ案内者トシテ二萬餘騎船坂山ヘソ向ハレケル

十七日<sup>甲子</sup>命一色道猷令攻豊後玖珠城 相馬彌次郎光胤捧軍忠目安



歷代鎮西要畧云十七日將軍差遣一色入道道猷令追討玖珠敵戶次豐前太郎洞四郎入道等馴肥前筑前之武士賜御教書屬之廿三日至豐後攻玖珠城三許日肥前國大深堀氏族最軍忠相馬文書載

相馬彌次郎光胤申軍忠事

右白河上野入道家人等宇多庄熊野堂楯籠間今月十六日馳向彼所致合戰分取手負事

相馬九郎五郎胤景分取二人須江八郎分取一人白川上野入道家相馬十次郎家人相馬小次

郎胤顯生捕二人白川上野入ト家人小田木幡三郎兵衛尉分取一人相馬彦次

郎分取一人新田左馬亮經政代田島小四郎標葉孫三郎分取一人東條七郎右衛門

尉分取一人木幡二郎討死畢

右此外雖有數輩切捨畧之畢乎仍追散敵對治乎

建武三年三月十七日

惣領代子息彌次郎光胤

進上 御奉行所 承了判

十八日丑乙赤松律師則祐得平因幡守秀光馳參鎮西御陣申中國事宜勸御上洛 給河野通信舊領於同氏九郎左衛門

太平記云多々良濱ノ合戰ノ後筑紫九國ノ勢一人トシテ將軍ニ從ヒ靡

カスト云者ナカリケリ然レモ中國ニ敵陣充滿シテ道ヲ塞キ東國王化

ニ從テ御方ニ通スル者少カリケレハ左右ナク京都へ攻上ラン事ハ如

何有ヘカラント此春ノ敗北ニ懲懼テ諸卒敢テ進ム義勢モ無リケル處

ニ赤松入道カ三男則祐律師並ニ得平因幡守秀光播磨ヨリ筑紫へ馳參

テ申ケルハ京都ヨリ下サレタル敵軍備中備前播磨美作ニ充滿シテ候

トイヘトモ是皆城々ヲ攻兼テ氣疲レ糧盡タル折節ニテ候間將軍コソ

大勢ニテ御上洛候ヘトタニ承及候ハ、一タマリモ堪ヘマシト存候若

御進發延引候テ白旗城攻落サレナハ自餘ノ城一日モ堪候マシ四箇國

ノ要害皆敵ノ城ニ成テ候ハンスル後ハ何百萬騎ノ勢ニテモ御上洛叶



フマシク候是則趙王カ秦兵ニ圍レテ楚項羽舟筏ヲ沈メ釜甌ヲ燒テ戰  
負ハ士卒一人モ生テ返ラシトセシ戰ニテ候ハスヤ天下ノ成功只此一  
舉ニ有ヘキニテ候者ヲト詞ヲ殘サテ申ケレハ將軍是ヲ聞給テ實モ此  
議サモアリト覺ルソサレハ夜ヲ日ニ繼テ上洛ヲ急クヘシ但九州ヲヒ  
タスラ打捨テハ叶マシトテ仁木四郎次郎義長ヲ大將トシテ大友少貳  
兩人ヲ留置キ云々

梅松論云斯て歸洛の事兩義あり一には諸國の御かゝ力を落とさぬ先よ  
いろかるへきか一にハ兵糧のため秋を可待歟御さた未定すして宰  
府に三月三日より四月三日まで御座ありし時分播磨より赤松馳申て  
云新田金吾大將として多勢を以て當城に向て陣を取圓心か一族其外  
京都より九州へ參する輩馳籠る間城の中の勢満足せといへども兵糧  
用意なきの間もし御歸洛延引あらは堪忍せしめかゝし御進發を急か  
るへし又備前の國三石の大將尾張親衛同申て云新田脇屋大將として

向ふ間兵糧用意なきよし赤松と同申

河野文書載

伊豫國河野四郎通信跡所領等爲本領之上者任先例可致沙汰之狀如  
件

建武三年三月十八日

尊氏御判

河野九郎左衛門殿

廿日卯被命凶徒征伐事於本多右馬允助定

本多文書載

志村已下凶徒等致路頭煩越前伊井城迄參路事於狹石關大草伊豆守  
仁隨催群内勢彼可被鎮狼籍也依忠節可恩賞之狀如件

建武三年三月廿日

源朝臣御判

本多右馬允殿

廿二日巳被命新田與黨誅伐事于飯嶋小三郎



古證文載

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事相催一族致軍忠者可有恩賞之狀如之

建武三年三月廿二日

尊氏判

飯嶋小三郎とのへ

廿五日壬申給出雲國大野庄地頭職於日置政高 肥後八代黑嶋城合戰

集古文書載

御判

下 日置政高

可早領知出雲國大野庄普河村內國守名地頭職事

右人如本所補任彼職也者可領知之狀如件

建武三年三月廿五日

小代光信申狀云三月廿五日屬于大將軍一色殿御手可馳向同國八代黑嶋城之由預御教書之間以同廿五日馳向彼城追落凶徒等事

廿六日癸酉就肝付八郎誅伐事被下御書於稱寢郡司等 依朝野彦太郎光世

申軍忠事奉行人等執達允許旨

嶋津文書載

新田右衛門佐義貞與黨誅伐事所被下 院宣也爰肝付八郎兼重以下

凶徒搆城郭所差遣嶋津上總入道道鑑也可致軍忠之狀如件

建武三年三月廿六日

御判

稱寢郡司一族中

古簡雜纂載

朝野彦太郎光世申軍忠去二日於多々良濱致合戰之刻分取之上舍弟光種討死之實否止見知否載起請之詞可注申候仍執達如件

建武三年三月廿六日

兵庫允

前豐後守

尾張權守



武藏孫次郎殿

廿七日戊甲此日豐後玖珠城落居又拔筑後秋月城

歷代鎮西要畧云廿七日城陷一色道猷命仁木左馬助筑後討治筑後之敵

亦發向肥後了菊池輩今川藏人太夫或曰佐竹源藏人守肥後太宰中務大夫筑

後仁木上野左馬助掌大兵伐秋月不日陷城秋月父子一族二十餘人於宮

方致死將軍屠其城

廿八日乙亥依肝付八郎事賜御書於大隅左京入道 相馬彌次郎光胤捧軍忠

目安

島津文書載

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事隨守護催促可抽軍忠之狀如件

建武三年三月廿八日

御判

大隅左京進入道殿

相馬文書載

相馬彌次郎光胤申軍忠事

右今月廿二日爲廣橋大將寄來小高城御敵等事

相馬小次郎胤盛家人出張分惣領家人取一人石町又太郎標葉相馬小次郎胤顯敵一人

小島田五郎太郎頭相馬孫五郎長胤家人三郎二郎相馬五郎胤經家人

大島彦太郎相馬相馬九郎胤國中五郎二郎相馬彌次郎實胤中間九郎太郎

相馬五郎胤經家人增尾十郎相馬四郎良胤家人三郎太郎須江八郎中

間被疵乎青田新左衛門尉被疵乎

右如此合戰之間同廿四日追散敵乎了然除矢戰并殘乎疵乎仍欲捧注  
進狀處爲尻政御內侍所大泉平九郎被馳來以次 標葉庄爲對治合戰

次第今月廿七日

相馬九郎五郎胤景標葉孫四郎相馬孫次郎行胤生捕二人標葉孫九郎

相馬小次郎胤盛生捕二人標葉孫三郎四郎長田孫相馬小次郎家人生

捕一人落合彌八郎



田信彥太郎生捕一人標葉彌七郎

武石左衛門五郎胤通酒田孫五郎渡野部六郎兵衛尉分取二人惣領家人木幡三郎左衛

門尉分取十人相馬六郎長胤被疵乎相馬九郎次郎胤直被疵乎相馬五郎胤

綱家人被疵乎

右此合戰次第侍所大泉平九郎被實檢畢然早爲御判注進狀如件

建武三年三月廿八日

進上 御奉行所 承了判

是月島津式部孫五郎入道道慶上軍忠事書請恩賞

島津文書載

島津式部孫五郎入道道慶謹言上

欲早依度々軍忠預御注進浴恩賞事

右道慶最前馳參御方去正月廿七日鴨河原合戰之時致軍忠之條即御

見知了同廿八日召捕直伯耆守長年若黨和賀屋彌太郎并兵衛次郎令

具參多々良濱河原屬于當御手申入之處可被誅之由直被仰下被切畢  
同晦日於五條河原致合戰之條畠山小松孫太郎見知畢然早且預御注  
進且爲賜御承判恐々言上如件

建武三年三月日

承了判



後鑑卷之十二

尊氏將軍記第四之五起建武三年四月盡五月

建武三年丙子

四月小

三日巳左武衛兄弟依御上洛發太宰府給可擬御祈丹誠旨以細川定禪被命於伊豫國三島社人等高師直傳書阿蘇大官司

梅松論云九國には一色入道仁木右馬助松浦等並國人以下をとめて建武三年四月三日太宰府を立て御進發ありしほとに太宰少貳並九國の輩博多の津より纜を解て兩將は長門の府中にはらく御逗留にて當所より御出舟有御船の事は元暦のむかし九郎大夫判官義經壇の浦の戦に乗さりし當國串崎の船十二艘の船頭の子孫の舟なり義經平家追討の後此船においては日本國中の津泊において公役あるへからすと自筆の御下文を今よ是を帶す今度此船を以御座船に定られけるは



尤嘉例に相叶へり是は長門守護厚東申沙汰する所なり  
集古文書載

當家御祈禱可被致精誠之候仍當社御寄附事其子細可被申沙汰之狀  
如件

建武三年卯月三日

定禪判

三島社大祝殿

阿蘇文書載

肥後國阿蘇社大官司職事以子孫中之名字可被舉申候條依仰執達如  
件

建武三年卯月三日

武藏權守

阿蘇大官司太郎入道殿

五日<sup>辛巳</sup>長講堂領不可有違亂之由被奉誓文於内裡  
諸家文書纂載

長講堂御領事等不可有武家妨之旨鎌倉右大將賴朝寔守彼例者承久  
四年重令賄行訖任兩度先蹤陣御領等不可違亂之由可加下知候以其  
旨可令洩奏尊氏恐惶謹言

建武三年四月五日

左兵衛督尊氏判

日野大納言殿

六日<sup>壬午</sup>給御書於杉原彦太郎被賞其軍忠  
福山志料載

今度九州發向之節抽軍忠分取之條誠神妙也依右狀如件

建武三年四月六日

御判尊

杉原彦太郎殿

十三日<sup>己丑</sup>肥後安樂寺合戰  
託磨宗近申狀云四月十三日肥後國安樂寺合戰時被射宗直乘馬訖同舍  
弟新左衛門尉令分捕訖



十五日卯<sup>辛</sup>以伊豫國檀生郷地頭職被充同國菅生寺叅徒  
豫州松山舊記載

伊豫國檀生郷西方地頭職内僕○○事爲御祈禱並勳功之賞所被宛行  
也守先例可致沙汰者依 將軍家仰下知如件

建武三年四月十五日

兵部少輔

阿波守

菅生寺叅徒御中

十六日辰<sup>壬</sup>肥後鳥栖原合戰

託磨宗近申狀云四月十六日鳥栖原合戰之時宗直抽軍忠親類託磨彦四  
郎允右ウテ被射訖

小代光信申狀云四月十七日同國鳥栖原合戰之時捨身命致散々合戰之  
間親類彦次郎宗成被疵<sup>左智板ノハ</sup>同若黨左近次郎被疵<sup>左膝口</sup>仍勘文  
分明之上同時合戰之仁絶間三郎并當國築地七郎入道等令見知畢有御

尋不可有其隱矣

廿五日丑<sup>辛</sup>鎮西菊池黨類蜂起依之有大友託磨太郎可抽精忠之命仁木義長  
執達之

志賀文書載

菊池與同凶徒等蜂起事如今月廿日御教書者相催九州軍勢等可被軍  
忠云々不日可被馳參也仍執達如件

建武三年四月廿五日

源義長判

大友託磨豐前太郎殿

廿七日卯<sup>癸</sup>着御周防笠戸就美作國凶徒對治給御書於三浦介被催其發軍  
集古文書載

美作國凶徒對治事相催備中美作兩國軍勢可致嚴密沙汰且爲京都發  
向所着周防國笠戸也存其旨殊可致精誠之狀如件

建武三年卯月廿七日

御判



三浦介殿

五月小

一日<sup>丙午</sup>艤軍艦於安藝嚴嶋社自此日連三日夜參籠三寶院賢俊僧正持參持明院殿院宣

太平記云同廿八日ニ順風ニ纜解テ五月一日安藝嚴嶋へ船ヲ寄ラレテ三日參籠シ給フ其結願ノ日三寶院僧正賢俊京ヨリ下テ持明院ヨリ成サレケル院宣ヲソ獻リケル將軍是ヲ拜見シ給テ函蓋相應シテ心中ノ所願既ニ叶ヘリ向後ノ合戰ニ於テハ勝スト云事有ヘカラストソ悅給ヒケル去四月六日法皇ハ持明院殿ニテ崩御ナリシカハ後伏見院トソ申ケル彼崩御已前ニ下セシ院宣ナリ

保曆間記云二月後伏見院御子今ハ先帝新院ト申忍テ尊氏ノ許へ綸旨ヲ成サル早々凶徒等ヲ退テ君ヲ本位ニ即奉ルヘシトナリ尊氏九州ニテ彼綸旨ヲ拜シテ悅テ西國ノ兵ヲ引具シテ攻上ル一旦天命ヲ恐テコ

ソ有ツレ此勅命ヲ蒙ル上ハ打勝事仔細ナシトテ則上ル云々

五日<sup>庚戌</sup>嚴島解纜着備後鞆浦給

太平記云將軍ハ嚴島ノ奉幣事終テ同五日嚴島ヲ立給へハ伊豫讚岐安藝周防長門勢五百餘艘ニテ馳參ル同七日備後備中出雲石見伯耆ノ勢六千餘騎ニテ馳參ル其外國々ノ軍勢招サルニ集リ攻サルニ從ヒ着事只吹風ノ草木ヲ靡カスニ異ナラス

梅松論云五月五日の夕備後の鞆に御着あり當津に御逗留ありけるに諸國の御方同心に申けるは御歸洛いそかるへき趣ともなり仍て御合戰評定區々なり一議云兩將ハ御船にて四國中國の大將國人等陸地を發向もへきか一議には兩將皆陸地を御むかひあるへきか一議にハ兩將御船にて御進發あるへきか各大大議によりていま落居せざる處に太宰少貳頼尙進で申けるは兩將御船にて御進發の義更ニ愚意のおよはざる處なり天下の是非ハ今度の御手合によるへきか既に敵播磨備



前兩城を圍むよし其告あり是等を對治して大半は落居あるへきか然  
 に船軍はかりにては凶徒の對治落居しかと幸に兩將御座の上は將  
 軍ハ御船頭殿ハ陸地を御發向あるへし頼尙陸地の先陣を承て亡父妙  
 惠か遺言に任て百か日の追善合戰して佛事に仕るへし頼尙生前の訴  
 訟只この事なりとまきりに申ける間此議然るへしとて將軍は御船下  
 御所は陸地を御發向治定して則御手分あり御船には執事師直關東京  
 都より供奉の宿老兩國の輩を船に乗せられて御發向あるへし下御所  
 の御手には高越後守師泰關東京都の供奉の壯士等並に少貳大友長門  
 周防安藝備前備中の御家人等屬し奉る去春二月御下向の時より國の  
 大小に従て馬鞍物具弓矢楯兵糧米の用意を致すへきよし守護人等に  
 嚴密に仰合されしかはみな其沙汰を致そこれ遠方の境より供奉の輩  
 に配分したもふへき御計なり

九日<sup>甲寅</sup>相馬彌次郎光胤捧軍忠目安

相馬文書載

相馬彌治郎光胤申

今月六日於宇多庄熊野堂致合戰若黨五十嵐彌四郎入道田信乘阿同  
 子息左衛門三郎討死仕訖同七日小高城差遣軍勢致合戰御敵十三人  
 切懸仁爲後證可賜御證判候仍注進如件

建武三年五月九日

平光胤上

進上 御奉行所 承候訖判

十日<sup>乙卯</sup>柄浦開帆左典厩分兵自陸路上洛

太平記云新田左中將ノ勢既ニ備中備前播磨美作ニ充滿シテ國々ノ城  
 ナ攻ル由聞ヘケレハ柄浦ヨリ左馬頭直義ヲ大將ニテ二十萬騎ヲ差分  
 テ陸路ヲ上セラル將軍ハ一族四十餘人高家一黨五十四人上杉一類三  
 十餘人外様ノ大名百六十頭兵船七千五百餘艘ヲ漕雙テ海上ヲソ登ラ  
 レケル同五日備後柄ヲ立給ヒケル時一ツノ不思議アリ將軍屋形ノ中



ニ少マトロミ給ヒタリケル夢ニ南方ヨリ光明赫奕タル觀世音菩薩一尊飛來マシマシテ船ノ舳ニ立給ヘハ眷屬ノ二十八部衆各弓箭兵仗ヲ帶シテ擁護シ奉ル體ニソ見給ヒケル將軍夢覺テ見給ヘハ山鳩一ツ船ノ屋形ノ上ニアリ彼此偏ニ圓通大士ノ擁護ノ威ヲ加ヘテ勝軍ノ義ヲ得ヘキ夢想ノ告ナリト思召ケレハ杉原ヲ三帖短冊ノ廣サニ切セテ自ラ觀世音菩薩ト書セ給ヒテ舟ノ櫓毎ニ押セラレケル角テ舟路ノ勢既ニ備前吹上ニ着ケハ歩路ノ勢ハ備中草壁庄ニソ着ニケリ  
天正異本云備後鞆ニテ軍ノ評定アリケルニ得平源太秀光進テ申ケルハ義貞大勢ニテ備前備中播磨美作ニ勢ヲ差分テ道々ヲ塞キ城々ヲ取圍テ攻候是等ヲ御對治ナクハ御方利ヲ失候ヘシ其上兩御所一ツニ海路ヲ御上洛ハ然ルヘカラサルノ由頻ニ申ケレハ將軍最其謂アリトテ鞆浦ヨリ直義ニハ二十萬騎ヲ差副テ陸路ヲ上セ奉リケル云々  
梅松論云五月十日備後の鞆を立て船路陸路同日に御發向あり船は纜

を解陸は轡を鳴しぬ先陣ハ太宰少貳賴尙二千餘騎と聞えし暫ハ海と陸と互に見かよはしたりしに少貳賴尙は旗の横紙にあやい笠を附たりこれは御眷屬御靈影向ありて蟬口に御座の故にむかしより當家の庭訓なり御船五十餘町過て見渡したれば船共多き中に先船には御紋の幕を引て漕向よりしを楠の謀に味方と號して向など聞へて少々騒たりしうともさはかくして四國の細川の人々土岐伯耆六郎伊豫の河野の一族其ほかの國人等五百餘艘其勢五千餘騎とそきこへし

十三日<sup>戊午</sup>筑前三奈木原合戰

託磨宗近申狀云五月十三日筑前國三奈木原合戰之時致軍忠訖仍自京都神妙之由被成御感御教書訖

十五日<sup>庚申</sup>着御備後兒嶋

梅松論云五月十五日備前國兒嶋に着給ふ當所は佐々木の一族の所領なる間加地筑前守渚近く假御所を作り御風呂など立御休息ありしに



其夜の満月に黒雲二筋引渡數刻見へしかは軍勢皆合掌して拜し奉る  
 これは大なる奇瑞なりし凡今度九州御座の間諸社の不思議とも御方  
 の吉兆あるまにいとまあらき殊に有かさかりしは太宰府に御座の時  
 博多の櫛田の宮住吉の御社の下女に託していはく吾今度兩將を都迄  
 守護し安穩に送へきか但合戦をいたすへし白旗一流鎧御劔弓征矢上  
 矢の鏑を差副て獻へしと御託宣新なりし間悉く調進せられける御使  
 者の見る前にて神託の女弓を張上矢の鏑をはけていはく我をうたか  
 ふもの多し其證は今度武將天下をとるへくハこの矢一もはつるへか  
 らすとて標樹の細枝を射ること三度一つもはつるゝことなしさらに  
 賤女の業にあらま此外天神の使者の御靈合戦の度ことに光をかゝや  
 かしたまふにう安堵しけるまた武將御下向の時靈夢の子細有て白葦  
 毛ある老馬を舩に立て御座船に率添らるまた上より諸軍勢にいたる  
 まて兜の眞向に南無三寶觀世音菩薩と書付て毎月十八日觀音懺法を

讀せらる御下向の時は三百餘艘の船より僧達を召れしに人數乏から  
 す御歸洛の時ハいふにれよはを勤行ありし云々

十八日癸亥左典厩攻落備後福山城 脇屋義助退陣播磨

太平記云五月十五日ノ宵ヨリ左馬頭直義三十萬騎ノ勢ニテ勢山ヲ打  
 越福山ノ麓四五里カ間數百箇所ニ陣ヲ取テ篝ヲ燒テソ居タリケル此  
 勢ヲ見テハ如何ナル鬼神トモイヘ今夜落ヌ事ハヨモ非シト覺ケルニ  
 城ノ篝モ燒止ヌ猶堪タリト見ヘケレハ夜既ニ明テ後先備前備中ノ勢  
 共三千餘騎ニテ押寄淺原峠ヨリソ懸タリケル是迄モ城中鳴ヲ靜メテ  
 音モセスサレハコソ落タリト覺ルソ関ヲ揚テ敵ノ有無ヲ知レトテ三  
 千餘騎ノ兵共楯ノ板ヲ敲キ関ヲ作事三聲近附テ上ラントスル處ニ城  
 中ノ東西ノ城戸口ニ大鼓ヲ打テ関ヲ合タリケル餘處ニ控タル寄手  
 ノ大勢是ヲ聞テ源氏ノ大將ノ籠リタランスル城ノ小勢ナレハトテ聞  
 落ニハヨモセシト思ヒツルカ果シテイマタ堪タリケルソ悔テ手合ノ



軍仕損スナ四方ヲ取卷テ同時ニ攻ヨトテ國々ノ勢一方々々ヲ請取テ  
峯々ヨリ攻上リケル城中ノ者共ハ兼テヨリ思儲タル事ナレハ雲霞ノ  
勢ニ圍レヌレ共少モ騷カス此彼ノ木陰ニ立隱テ矢種ヲ惜マス散々ニ  
射ケル間寄手稻麻ノ如クニ立雙ヒタレハアタ矢ハ一ツモ無リケリ敵  
ニ矢種ヲ盡サセント寄手ハ態射サリケレハ城ノ勢ハイマタ一人モ手  
負ハス大江田式部大輔是ヲ見給ヒテサノミ精力ノ盡ヌ前ニイサヤ打  
出テ左馬頭カ陣一散シカケ散サントテ城中ニハ徒立ナル兵五百餘人  
ヲ留テ馬強ナル兵千餘騎引率シ城戸ヲ開カセ逆茂木ヲ引ノケテ北ノ  
尾ノ殊ニ嶮シキ方ヨリ喚テソ懸出ラレケル一方ノ寄手二萬餘騎是ニ  
懸落サレ谷底ニ馬ヲ馳コミイヤカ上ニ重リ伏ス式部大輔是ヲハ打捨  
東ノ離レ尾ニ二引兩旗ノ見ユルハ左馬頭ニテソ有ラントテ二萬餘騎  
控タル勢ノ中へ破テ入時移ルマテソ鬪ハレケル是モ左馬頭ニテハ無  
リケルトテ大勢ノ中ヲ颯ト懸拔テ御方ノ勢ヲ見給へハ五百餘騎討レ

テ纔ニ四百騎ニ成ニケリ爰ニテ城ノ方ヲ遙ニ觀レハ敵ハヤ入替リヌ  
ト見ヘテ櫓搔楯ニ火ヲ懸タリ式部大輔其兵ヲ一所ニ集メテ今日ノ合  
戰今ハ是迄ソイサヤ一方打破テ備前へ歸リ播磨三石ノ勢ト一ニナラ  
ントテ板倉橋ヲ東へ向テ落給へハ敵二千騎三千騎此彼ニ道ヲ塞テ打  
留ントス四百餘騎ノ者共モ遁ヌ處ソト思切タル事ナレハ近附敵ノ中  
へ破テ入驅散シ板倉川ノ邊ヨリ唐皮迄十餘度マテコソ戰ヒケルサレ  
共兵モサノミ討レス大將モ恙ナカリケレハ虎口ノ難ヲ遁テ五月十八  
日早且ニ三石宿ニソ落着ケル左馬頭直義ハ福山ノ敵ヲ追落シテ事始  
ヨシト悅給フ事斜ナラス其日一日唐皮宿ニ逗留有テ首ノ實檢有ケル  
ニ生虜討死ノ首千三百五十三ト記セリ當國吉備津宮ニ參詣ノ志オハ  
シケレトモ合戰ノ最中ナレハ觸穢ノ憚有トテ只願書計ヲ籠ラレテ翌  
日唐皮ヲ立給へハ將軍モ舟ヲ出サレテ順風ニ帆ヲソ揚ラレケル五月  
十八日ノ晚景ニ脇屋右衛門佐三石ヨリ使者ヲ以テ新田左中將ノ方へ



立テ福山ノ合戦ノ次第委細ニ注進セラレケレハ其使者聽テ馳返テ白旗三石菩提寺城イマタ攻落サル處ニ尊氏直義大勢ニテ船路ト陸路トヨリ上ルト云ニ若陸ノ敵ヲ支ン爲ニ當國ニテ相峻ハ舟路ノ敵差違テ帝都ヲ侵サン事疑ナシ只速ニ西國ノ合戦ヲ打捨テ攝津國邊マテ引退キ水陸ノ敵ヲ一處ニ竣受帝都ヲ後ニ當テ合戦ヲ致スヘク候急キ其ヨリモ山里ノ邊へ出合レ候へ美作へモ此旨ヲ申遣シ候ツルナリトソ仰ラレタリケル是ニ依テ五月十八日ノ夜半許ニ官軍皆三石ヲ打捨テ船坂ヲソ引レケル

梅松論云五月十七日に下御所の御陣備中の河原と備前の兒嶋の間三里下御所より御使あり當手には備中備後安藝周防長門の大將守護人國人等並ニ三浦介美作國より昨日馳參す太宰少貳大友供奉の間御勢數をしらき候御船には四國の勇士等參着のよし承る目出度候但播磨の赤松備前の三石の城合戦の最中のよし聞候處に結句新田江田某大

將として馳下て近日備中の福山に楯籠る間今夕手分せしめ明日拂曉に追落し火を擧へく候彼の城と御陣の兒島近所たる間御用心の爲に馳申處也去程に翌日十八日觀音懺法行はれ滿散過て當所の景物楊梅取に上の山に登りける下部馳下ていはく既に味方の大勢福山を攻落して亂入て火を放つ間敵皆落行よし申上げる時分から實に佛神の御加護と憑敷る思召ける則陸地の御勢備前國へ攻入たまひしかハ三石城の寄手脇屋没落すと聞へしかは下御所より飛脚を以て賀し申さる聽て兒島の御船を出さる海と陸との御陣日夜約束の火を擧られしかは山をへさてなから互に御陣の在所をろ知召されける

廿日<sup>乙</sup>丑以備後國地給杉原彦太郎信平

福山志料載

下 杉原彦太郎信平

可令早領知備後國本郷庄木梨庄地頭職事



右以人爲勳功之賞所宛行也者任先例可沙汰之狀如件

建武三年五月廿日

廿三日<sup>辰戌</sup>着御播磨杓子浦 此日新田義貞退陣兵庫

太平記云新田左中將義貞ハ備前美作ノ勢トモヲ埃汰ヘン爲ニ賀古川ノ西ナル岡ニ陣ヲ取テ二日マテソ逗留シ給ヒケル折節五月雨ノ降ツキテ河ノ水増リケレハ跡ヨリ敵ノ懸事モコソ候ヘ先總大將又宗徒ノ人々計ハ舟ニテ向ヘ御渡候ヘカシト諸人口々ニ申ケレトモ義貞サレ事ヤ有ヘキ渡サヌ先ニ敵懸リタラハ中々引ヘキ方無シテ死ヲ輕ンセンニ便アリサレハ韓信カ水ヲ背ニシテ陣ヲ張シハ是ナリ軍勢ヲ渡シ果テ義貞後ニ渡ルトモ何ノ痛カ有ヘシトテ先馬弱ナル軍勢手負タル者トモ漸々ニソ渡サレケル去程ニ水一夜ニ落テ備前美作ノ勢馳參リケレハ馬筏ヲ組テ六萬餘騎同時ニ川ヲソ渡サレケル是迄ハ西國勢共馳參テ十萬騎ニ餘リタリシカ將軍兄弟上洛シ給フ由ヲ聞テ何ノ間

ニカ落失ケン五月十三日左中將兵庫ニ着給ヒケル時ハ其勢纔二萬騎ニモ足サリケリ

梅松論云去程ニ備前三石の寄手の勢落上りしかは新田義貞赤松の城の圍を解て没落をまかる間陸地の大勢は播磨の懸河に陣を取御船は同室の泊に着たまふ翌日赤松入道御船へ參申ていはく今度圓心か城ニ馳籠る軍勢の着到並に敵没落の時攻口に捨置旗百餘流持參す一々御披見ありしかは家々の紋紛れす武將仰られけるは是を見るに根本敵なるは是非に及はず味方へ戦功ある輩ハ少々見ゆるか一旦の害を逃れむか爲に義貞に屬しける心中不便なり是等もはさして味方に參るへしとて中々快悦の御顔色なりしかハ實忝御意とを覺し此旗どもをハ數をまるとして後日沙汰あるへしとて赤松にを預られけるさて當所室と兵庫の間の海はをしてには必播磨灘とて御下向の時のことくよき順風を得ざる外ハ渡らざる難所たる間日よりを待れしほどに既



に陸地の御勢は進みたまふに御船の御逗留を諸軍勢歎し時分五月廿三日戌刻に雨交りたる西風些し吹將軍御悦ありて仰られけるは此風ハ天の與ふる物かはや纜を解へしとありければ或議云海上の事其議を得も意見を申かこし大船どもの船頭を召れて御尋あるへしとあるに仍て御座船串崎の船頭千葉大隅守か舟をきはし船頭大友少貳長門周防の舟の船頭十四人御前に列して申けるはこの風は順風なれども月の出潮ニ吹替て向ふへきう出されては若途中にて難儀あるへきかどありければ爰に上杉伊豆守の乗船名をは今度船と號き長門安武郡椿の浦の船頭孫七畏て申けるはこれは御大慶の順風と存候其故は雨は風の吹出て降候月の出は雨は止候へし少ハこはく候ども追風なるへきよし一人申上たりしかは御本意たるによりて御感再三におよふ忝御意をかけられ左衛門尉になさる將軍仰られけるは元暦のむかし九郎判官義經渡邊より大風なりしかども順風なれハこそを渡りつら

めとて雨の止をも御疎なくして御座船出さる危かるへきよし數多の船頭申上るを聞召れまして一人か申を御許容如何と内々申輩ありけれども進む御道なれば意見に及はず既に御船を出されければ總して船數大小五千餘艘と聞へし去なから其夜御供に出し船三千艘に過<sup>術</sup>過さりけり月の出潮を疎て室より五十町東なる杓子浦に御船かゝる案のことく雨止しかは月とゝもに御座船走りけりこハかりしかども順風なりければ皆帆を上て走りけるに夜の明方になりしかども近くは山見へぬ海中に浪は屏風を立たることくなれば心細かりしかども云々

廿四日<sup>巳</sup>諸船下碇大藏谷邊有軍評定 此日相馬彌二郎光胤於陸奥戰死梅松論云廿四日の暮ほどに御船を始として播磨の大藏谷の澳に泊るを下してかゝりたまひし四國船を本船にて御先にはしる是も淡路の瀬戸須摩明石の澳に泊りし夜になりしかは皆船の舳艫にとほす籌



火實浪を焼かどろ見へし陸地の勢は一谷を前にあてむかし土居次郎實平か陣取たりける鹽屋の邊より始て後は大藏谷猪名見邊迄る篝は焼たりし海と陸との兩陣見渡されし間明日五月廿五日兵庫の合戦の事御談合の御使夜の中に往復度々にれよふ當所において御手分あり追手は下御所副大將は越後守師泰大友三浦介赤松播磨美作備前三ヶ國の總軍勢なり山の手の大將軍は尾張守殿安藝周防長門守護厚東並に軍勢共なり濱の手は太宰少貳賴尙並に一族の分國筑前豊前肥前山鹿麻生薩摩の輩相したうへて向ふへきにう定められける

相馬系圖云光胤孫五郎重胤次男彌次郎父重胤屬軍將斯波隊下在鎌倉建武三年三月十日斯波及重胤送書於行方曰成敵之輩悉可追伐且於小高村宜構城郭云々故攻處々敵館而退治凶徒且築小高城同二十二日廣橋修理亮經泰將數千騎而襲來小高城因與此防戰同二十四日敵退散同廿七日於標葉郡合戰時敵多討取焉侍所大泉平九郎檢知之同三月十六

日白 上野入道一族楯籠宇太庄熊野堂時光胤屬奥州海道軍將式部大輔兼賴隊下而進攻之敵遂敗散同二十二日四日七日數合戰同五月六日合戰致軍忠敵多討取捕焉同七日合戰有功同二十四日國司顯家卿率數萬騎來攻小高城因與此防戰光胤及相馬六郎長胤同七郎胤治同四郎成胤同十郎胤俊此外家人等討死云々時兼賴弱年也氏家十郎道誠代之而差副起請文獻鎌倉以上合戰中一族郎等或討死被創或討敵得首級各有證文

廿五日庚午兵庫合戰楠正成戰死新田義貞敗還京師左武衛以兵庫奥御堂爲御陳此日以丹波國船井庄被寄北野社依軍功以宗右馬頭賴茂爲九州侍所

太平記云明レハ五月廿五日辰刻ニ澳ノ霞ノ晴間ヨリ幽ニ見ヘタル船アリイサリニ歸ル器人カ淡路ノ瀬戸ヲ渡ル船カト海邊ノ眺望ヲ詠テ潮路遙ニ見渡セハ取楫面楫ニカイ楯カイテ艦舳ニ旗ヲ立タル數萬ノ



兵船順風ニ帆ヲソ擧タリケル烟波渺々タル海ノ面十四五里カ程ニ漕  
連テ舷ヲ輾リ艦舳ヲ雙タレハ海上俄ニ陸地ニ成テ帆影ニ見ユル山モ  
ナシ中先和田ノ御崎ノ小松原ニ打出テ靜ニ手分ヲソシ給ヒケル一方  
ニハ脇屋右衛門佐義助ヲ大將トシテ末々ノ一族二十三人其勢五千餘  
騎經嶋ニソ控ヘタル一方ニハ大館左馬助氏明ヲ大將トシテ相從一族  
十六人其勢三千餘騎ニテ燈燼堂ノ南ノ濱ニ控ラル一方ニハ楠判官正  
成態他ノ勢ヲ交ヘスシテ七百餘騎湊川ノ西宿ニ控ヘテ陸路ノ敵ニ相  
向フ左中將義貞ハ總大將ニテオハスレハ諸將ノ命ヲ司テ其勢二萬五  
千餘騎和田御崎ニ帷幕ヲ引セテ控ヘラル中遠矢射損シテ敵御方ニ笑  
レ憎マレケル者恥ナス、カントヤ思ヒケン船一艘ニ二百餘人取乗テ  
經島ヘ差寄せ同時ニ磯ヘ飛下テ敵ノ中ヘソ打テ懸リケル脇屋右衛門  
佐ノ兵トモ五百餘騎ニテ中ニ是ヲ取籠弓手馬手ニ相附テ繩手ヲ廻シ  
テソ射タリケル二百餘騎ノ者トモ心ハ猛シトイヘトモ射手モ少ク徒

立ナレハ馬武者ニ懸惱サレテ遂ニ一人モ殘ラス討レニケレハ乗捨ル  
船ハ徒ニ岸打浪ニ漂ヘリ細川卿律師是ヲ見給ヒテ續ク者ノ無リツル  
故ニコソ若干ノ御方ヲハ故ナク討セツレイツテ期スヘキ合戦ソヤ下  
場ノヨカランスル所ヘ船ヲ着テ馬ヲ追下シ追下シ打テ上レト下知セ  
ラル四國ノ兵共大船七百餘艘紺邊濱ヨリ上ラントテ磯ニ傍テソ上リ  
ケル兵庫島三箇所ニ控タル官軍五萬餘騎船ノ敵ヲアケ立シト漕行船  
ニ隨テ汀ヲ東ヘ打ケル間船路ノ勢ハ自進テ懸ル勢ニミヘ陸ノ官軍ハ  
偏ニ逃テ引様ニソ見ヘタリケル海ト陸トノ兩陣互ニ相窺フテ遙ノ汀  
ニ着テ上リケレハ新田左中將ト楠ト其間遠ク隔テ兵庫島ノ船着ニハ  
支タル勢モナカリケル是ニ依テ九國中國ノ兵船六十餘艘和田ノ御崎  
ニ漕寄テ同時ニ陸ヘソアカリケル中正成正季東ヨリ西ヘ破テ通り北  
ヨリ南ヘ追靡ケヨキ敵ト見ルヲハ馳雙テ組テ落テハ首ヲ取合ヌ敵ト  
思フヲハ一太刀打テ懸散ス正成ト正季ト七度合七度分ル其心偏ニ左



馬頭ニ近附組テ討ント思フニアリ遂ニ左馬頭ノ五十萬騎楠カ七百餘騎ニ懸靡ケラレテ又須磨ノ上野ノ方ヘソ引返シケル直義朝臣ノ乗ラレタリケル馬鏃ヲ蹄ニ踏立テ右ノ足ヲ引ケル間楠カ勢ニ追ツメラレテ既ニ討レ給ヒヌト見ヘケル處ニ藥師寺十郎次郎只一騎蓮池ノ堤ニテ返シ合セテ馬ヨリ飛テチリ二尺五寸ノ小長刀ノ鏃ヲ取延テ懸ル敵ノ馬ノ平頸鞞ノ引廻シ切テハハ子倒シハ子倒シ七八騎カ程斬テ落シケル其間ニ直義ハ馬ヲ騎替テ遙々落延給ヒケリ左馬頭楠ニ追立ラレテ引退ヲ將軍見給ヒテ新手ヲ入替テ直義討スナト下知セラレケレハ吉良石堂高上杉ノ人々六千餘騎ニテ湊河ノ東ヘ懸出テ跡ヲ切ントソ取卷ケル正成正季又取テ返テ此勢ニカ、リテハ打違テ死シ懸入テハ組テ落三時カ間ニ十六度迄鬪ケルニ其勢次第々々ニ滅ヒテ後ハ纔ニ七十三騎ニソ成ニケル此勢ニテモ打破リテ落ハ落ヘカリケルヲ楠京ヲ出シヨリ世ノ中ノ事今ハ是迄ト思フ所存有ケレハ一足モ引ス戰テ

機既ニ疲レケレハ湊河ノ北ニ當テ在家ノ一村有ケル中へ走入テ腹ヲ切ン爲ニ鎧ヲ脱テ我身ヲ見ルニ切創十一箇所マテソ負タリケル此外七十二人ノ者トモ、皆五箇所三箇所創ヲ被ラヌ者ハ無リケリ一族十三人手ノ者六十餘人六間ノ客殿ニ二行ニ並居テ念佛十遍許同音ニ唱テ一度ニ腹ヲソ切タリケル中略楠既ニ討レニケレハ將軍ト左馬頭ト一處ニ合テ新田左中將ニ打テ懸リ給フ義貞是ヲ見テ西ノ宮ヨリアカル敵ハ旗ノ紋ヲ見ルニ末々ノ朝敵トモナリ湊河ヨリ懸ル勢ハ尊氏直義ト覺ル是コソ願フ所ノ敵ナレトテ西宮ヨリ取テ返シ生田森ヲ後ニ當テ四萬餘騎ヲ三手ニ分テ敵ヲ三方ニソ受ラレケル去程ニ兩陣互ニ勢ヲ振ヒテ鬪ヲ作り聲ヲ合ス先一番ニ大館左馬助氏明江田兵部大輔行義三千餘騎ニテ仁木細川カ六萬餘騎ニ懸合テ火ヲ散シテ相戰フ其勢互ニ討レテ兩方ヘ颯ト引ノケハ二番ニ中院中將定平大江田里見鳥山五千餘騎ニテ高上杉カ八萬騎ニ懸合テ半時許黒烟ヲ立テ揉合タリ其



勢共ニ戰疲テ兩方へ颯ト引退ケハ三番ニ脇屋右衛門佐宇都宮治部大輔菊池次郎河野土居得能一萬騎ニテ左馬頭吉良石堂カ十萬餘騎ニ懸合セ天ヲ響シ地ヲ動シテ攻戰フ或ハ引組テ落重リテ首ヲ取モアリ取ル、モアリ或ハ敵ト打違ヘテ同シク馬ヨリ落ルモアリ兩虎二龍ノ闘ニ何モ討ル、者多カリケレハ兩方東西へ引ノキテ人馬ノ息ヲソ休メケル新田左中將是ヲ見給ヒテ新手ノ兵既ニ盡テ戰イマタ決セス是義貞カ自ラ當ルヘキ處ナリトテ二萬三千餘騎ヲ左右ニ立テ將軍ノ三十萬騎ニ懸合セ兵刃ヲ交テ命ヲ鴻毛ヨリモ輕セリ中官軍ハ元來小勢ナレハ命ヲ輕シテ戰フト云ヘトモ遂ニハ大敵ニ懸負テ殘ル勢纔五千餘騎生田森ノ東ヨリ丹波路ヲ差テソ落行ケル

梅松論云廿五日卯刻に細川の人々四國の船五百餘艘を本船として猶追風なれば昨日のことく帆を上て敵のひかへたる湊川と兵庫の島を左ヨ見なしてを走ける敵の跡を塞うむ爲也將軍の御座船は錦の御

旗に日を出して天照太神八幡大菩薩を金の文字ヨ打て附らまさりければ日よう、やきてきらめきさりし手を解て浦風に翻へし御船を出さるゝ時ハ毎度鼓を鳴されし間同時に數千艘の船帆を舉て淡路の瀬戸五十町を狭しと輾り合て更ニ海は見へす漕並さりしに陸地の御勢も同じく打立て一谷を馳越とみへしほとに辰の終に兵庫嶋をちうく見渡しさりけれハ敵は湊川の後の山より里迄旗を靡し楯を並てひかへたりこれは楠太夫判官正成とを聞し播磨海道の須磨口も大勢向て支さり濱の手ハ和田の御崎の小松原を後に當て中黒の旗差て一万餘騎も有らむとみゑしう汀に三切にひかへたり先ハ五百餘騎はかりかど見へ其次は二千餘騎はかり次に松原をかけてひかへたり時移て巳刻に味方の三手の勢山の手須磨口濱手同時に向ひしかあしき、の故にや濱の手の少貳か勢ろ旗の下二千餘騎にて進さる殊に一町はかり先立て五百餘騎又是にすゝみて五十餘騎むかひし中より武者二騎十



丈計先立たる一騎は黒き馬に薄紅の母衣懸たる鎧の毛はさたかに見へす一騎は河原毛なる馬に黃威の鎧着たり二騎かから少貳か親類なり母衣かけたるハ武藤豊前次郎黃威の鎧は同對馬小次郎共に若年の者にてうありける陸と舟との間一町はかりを隔てされは船よりは棧敷の前の見物にてうありし御座船の鼓の亂聲聞へしかハ海上より作り始し関の聲を陸地の大勢請取て三度作り上矢の鏑響しかハ六種の震動もこれよは過しとを覺しこれをみて敵の先陣一矢も射せ引退く間次の陣に先立の一騎馬の足を直して懸りしを討せしと跡の大勢つゝきしほどに和田の御崎の合戦破れて兵庫の端の在家より烟上りしかハ大道もたまらず山の手も又かくのことし去程よ四國の勢兵庫の敵を落さしとて生田の森の邊より上りける所に義貞兵庫の戦に打負て三千騎計にて引けるに行逢たり敵は馬に乗る間船の味方共左右なく下さりける處に細川の人々從弟兄弟我も我もとすゝまれける中に

も卿公定禪弟帶刀先生古山杉田宇佐美大庭を先として船より馬を追下して打乗先八騎にて大勢の中へ入て戦けるか敵手まけかりけれハ馬を打浸して本の船に乗ける處よ讃岐の國人新野見小太夫といひける者勇て大將の御命に替候とて馬踏放て汀に一人残て打合けるを見たまひて定禪重て十六騎にてかけ上り戦はれけるを見て残るものと船より上りけれハ義貞打負て都をさして落にけり定禪義貞にハ目を懸きして湊川に楠正成殘て大手の合戦最中のよし聞へしかハ下御所の御勢に馳加りて攻戦し程に申の終に正成並に弟七郎左衛門尉以下一所に自害せる輩五十餘人討死三百餘人總して濱の手以下兵庫湊川にて討死する首の數七百餘人とを聞へしこれほどの戦かきは味方にも討死手負多かりけり湊川の軍破ましかハ御陣は御下向の時の兵庫の奥の御堂にてうありし高尾張守の手の者討取し間正成か首持參せらまける實檢あり紛るへきよあらず哀ある哉



楠系圖云正成河内守左衛門尉於攝州湊川討死贈正三位中將  
菊池系圖云武朝七郎建武三年五月廿五日湊川合戰時楠木正成一所自  
害

北野文書載

寄進 北野天滿大自在天神

丹波國船井庄地頭職

右爲天下泰平所願成就家門繁榮令寄進之狀如件

建武三年五月廿五日

源朝臣御判

宗系圖云賴茂右馬頭經茂子右馬頭鬼刑部少輔從將軍源尊氏而自九州  
上洛建武三年五月廿五日已刻於攝州和田御崎敗大勢之敵尊氏賞其武  
功九州侍所職於賴茂法名宗慶道號靈岩

廿六日辛未自兵庫移陣西宮

梅松論云去程に翌五月廿六日兵庫を立て西宮に御陣をめされき

廿七日癸酉主上行幸叡山新院光嚴院自途稱御腦被駐御駕左武衛進兵士奉迎  
入東寺此依兼日賜院宣也

太平記云官軍ノ總大將義貞朝臣纔ニ六千餘騎ニ討成サレテ歸洛セラ  
レケレハ京中ノ貴賤上下色ヲ損シテ周章騷事限ナシ官軍若戰ニ利ヲ  
失ハ、前ノ如ク東坂本へ臨幸成へキニ兼テヨリ議定アリケレハ五月  
十九日主上三種ノ神器ヲ先ニ立テ龍駕ヲソ廻サレケル中持明院法皇  
本院花園新院春宮ニ至迄悉ク皆山門へ御幸成進ラスへキ由太田判官  
全職路次ノ奉行トシテ供奉仕タルニ本院ハ兼テヨリ尊氏ニ院宣ヲ成  
下サレタリシカハ二度御治世ノ事ヤ有ンスラント思召テ北白河ノ邊  
ヨリ俄ニ御不豫ノ事有トテ御輿ヲ法勝寺塔ノ前ニ昇居サセテ態時ヲ  
ソ移サレケル去程ニ敵既ニ京中ニ入亂レヌト見ヘテ兵火四方ニ盛ナ  
リ全職是ヲ見テサノミハイツマテカ暗然トシテ待申ヘキナレハ供奉  
ノ人々ニ急キ山門へ成進ラスヘシト申置テ新院法皇春宮計ヲ先東坂



本ヘソ御幸成進ラセケル本院ハ全職カ立歸ル事モヤ有ンスラント恐シク思召レケレハ日野中納言資名殿上人ニハ三條中將實繼計ヲ供奉ノ人トシテ急東寺ヘソ成奉リケル將軍ナ、メナラス悦テ東寺ノ本堂ヲ皇居ト定ラル久我内大臣ヲ始トシテ落留リ給ヘル卿相雲客參ラレシカハ即皇統ヲ立ラル是ソハヤ尊氏運ヲ開カルヘキ瑞ナリケル異本太平記云時刻移リケル處ニ逆徒等既ニ亂入スト見ヘテ兵火四方ニアカリ鬨聲街衢ニ響ケレハ全職申ケルハ御違例ヲ推テ嶮岨ヲコエ奉ランモ行末ノ御煩御不豫御増氣ノ基成ヘシ逆臣既ニ京洛ニ入方々ニ合戰始ルヲ見ナカラ暗然トシテ竝奉ルヘキニ非ス敵ニ路ヲ推隔ラレナハ悔ルニ益有マシケレハ全職ハ先山門ヘ急馳參スヘシ面々御違例ノ様ニ依テ急山門ニ成奉ルヘシト供奉ノ人々ニ申置テ全職ハ山ヘ參リケリ此折節尊氏卿持明院殿ニ御兵士ヲ進シケレハ未明ニ山門ヘ出御ト仰ケレハ面々アキレテ若臨幸ニヤ參會スルト馳廻尋申ケルカ

聖運ヤ然ラシメケン誤タス石塔ノ邊ニテ參會シケレハ斜ナラス喜ヒ申尊氏卿ノ使ト申ケレハ君モ喜ヒ思召供奉ノ人々資名卿重資朝臣等モ各色ヲ直シケレハ聽テ武將ノ命トシテ六條長講堂ヲ御所トシテ武家衛護シ奉ル

梅松論云湊川にて正成を討て大勢にて都へ攻上るよじ聞へけきハ廿七日去正月の夕のことく又山門へ臨幸ある洛中へハ先丹波より仁木兵部大輔頼章今川駿河守貞頼丹後但馬兩國の軍勢をまたかへて各錦の御旗を先立て數千騎洛中へ打入云々

皇年代畧記云建武三年五月二十五日後醍醐帝山門行幸欲被伴申光嚴帝處依御惱不慮御逗留尊氏申沙汰奉入六條殿

廿九日乙亥御入洛用建武號

關城書裏書云五月廿九日尊氏入洛用建武曆以正慶天子爲治世之主以第二皇子豐仁親王爲主上



晦日子丙直義朝臣入洛

梅松論云下御所五月晦日御入京ありしに去春九州御下向の時捨奉りし輩多く降參す今度供奉忠功の仁等列座のとき忠不忠たる間顔色喜憂異なり

新千載集雜部云建武の頃おもひの外の事によりてつくしへ下り侍りけるか程なくかへりのほりてはへりけるに都に殘し置いて侍ける女のさまかへ侍りけるよしを聞てよみてつかはしける

左兵衛督直義

袖の色のかはると聞は旅衣立かへりても猶う露けき

後鑑卷之十三

尊氏將軍記第四之六建武三年六月

建武三年子丙

六月大

二日子丙左典厩分兵發向山門 此日菊池合戰

太平記云主上二度山門へ臨幸ナリシカハ三千ノ衆徒去春ノ勝軍ニ習テ貳心ナク君ヲ擁護シ奉リ北國奥州ノ勢ヲ待由聞へケレハ將軍左馬頭高上杉ノ人々東寺ニ會合シテ合戰ノ評定アリ事延引シテ義貞ニ勢屬ナハ叶フマシ勢イマタ微ナルニ乗テ山門ヲ攻ヘシトテ六月二日四方ノ手分ヲ定テ追手搦手五十萬騎ノ勢ヲ山門へ差向ラル追手ニハ吉良石堂澁川畠山ヲ大將トシテ其勢五萬餘騎大津松本東西ノ宿園城寺燒跡志賀辛崎如意嶽マテ充滿シタリ搦手ニハ仁木細川今川荒川ヲ大將トシテ四國中國勢八萬餘騎今道越ニ三石ノ麓ヲ經テ無動寺へ寄ン



ト志ス西坂本へハ高豊前守師重高土佐守大高伊豫守重成南部遠江守  
 岩松桃井等ヲ大將トシテ三十萬騎入瀬藪里靜原松崎赤山下松修學院  
 北白川マテ支テ音無瀧不動堂白鳥ヨリソ寄タリケル中其時シモ新田  
 左兵衛督ヲ始トシテ千葉宇都宮土居得能ニ至マテ東坂本ニ集居テ山  
 上ニハ行歩モ叶ハヌ宿老稽古ノ窓ヲ閉タル修學者ノ外ハ兵一人モ無  
 リケル此時若西坂ヨリ寄ル大勢トモ暫モ滯ナク四明嶽マテ打アカリ  
 タラマシカハ山上モ坂本モ防ニ便無シテ一時ニ落ヘカリシヲ猶モ山  
 王大師ノ御加護ヤ有ケン俄ニ朝霧深ク立隱シテ咫尺ノ内ヲモ見ワカ  
 ヌ程ナリケレハ前陣ニ作ル御方ノ関音ヲ敵ノ防ク矢叫ノ聲ソト聞誤  
 テ後陣ノ大將勢續カ子ハソ、ロニ時ヲソ移シケル處ニ大宮ヘナリ下  
 テ三塔會合シケル大衆上下歸參シテ將門童堂ノ邊ニ相支テコ、ナ前  
 途ト防ケル間面ニ進ミケル寄手三百餘人討レ前陣敢テ懸ラ子ハ後陣  
 ハ彌進ミ得ス只水飲ノ木陰ニ陣ヲトリ堀切ヲ界ヒテカイ楯ヲカキ互

ニ遠矢ヲ射違テ其日ハ徒ニ暮ニケリ

小代光信申狀云六月二日屬于大將軍御内武田方手押寄菊池燒拂在々  
 所々同懸入山浦尋搜凶徒畢

三日丁丑奉迎本院花園院新院光嚴院臨幸八幡山 此日傳御書於美作次郎泰光

催促國人參向

異本太平記云其後京中ノ合戰兩方ノ勝負イマタ落居セサルノ間六月

三日三主ノ臨幸ヲ八幡ニ成奉ル

皇年代畧記云六月三日臨幸八幡

本郷文書載

新田義貞己下凶徒等誅伐事被下院宣也早相催若狹國地頭御家人等  
 不日馳參可致軍忠之狀如件

建武三年六月三日

御判

美作次郎藏人殿泰光



七日<sup>辛巳</sup>高豐前守師重等責西坂 依今明合戰可抽丹誠之旨被令於清水寺  
執行

太平記云六月六日追手ノ大將ノ中ヨリ西坂ノ寄手ノ中へ使者ヲ立テ  
此方ノ敵陣ヲ伺ヒ見候へハ新田宇都宮千葉河野ヲ始トシテ宗徒ノ武  
士共大畧皆東坂本ヲ固タリト見へテ西坂ヲハ嶮シキヲ恃テ公家ノ人  
々サテハ山法師共ヲ差向テ候ナル一軍手痛ク攻テ御覽候へハカハカ  
シキ合戰ハヨモ候ハシ思フ圖ニ大嶽ノ敵ヲ追落サレテ候ハ、大講堂  
文殊樓ノ邊ニ引へテ火ヲ舉ラレ候へ同時ニ攻合テ東坂本ノ敵ヲ一人  
モ餘サス湖水ニ追ハメテ亡シ候へシトソ牒セラレケル西坂ノ大將高  
豐前守是ヲ聞テ諸軍勢ニ向テ法ヲ出シケルハ山門ヲ攻落スヘキ諸方  
ノ相圖明日ニアリ此合戰ニ一足モ退タラン者ハ縦ヒ先々拔群ノ忠ア  
リト云トモ無ニ處シテ本領ヲ沒収シ其身ヲ追出スヘシ一太刀モ敵ニ  
打達へテ陣ヲ破リ分捕ヲモシタランスル者ヲハ凡下ナラハ侍ニナシ

御家人ナラハ直ニ恩賞ヲ申與フヘシサレハトテ獨高名セントテ拔懸  
スヘカラス又傍輩ノ忠ヲ猜テ危キ處ヲ見放ツヘカラス互ニ力ヲ合共  
ニ志ヲ一ツニシテ斬トモ射トモ用ヒス乗越々々進ムヘシ敵引退カハ  
立歸ラサルサキニ攻立テ山上ニ攻上リ堂舎佛閣ニ火ヲ懸テ一字モ殘  
ラス燒拂ヒ三千ノ衆徒ノ首ヲ一々ニ大講堂ノ庭ニ斬懸テ將軍ノ御感  
ニ預リ給ヘカシト諸人ヲ勵シテ下知シケル惡徒ノ程コソ淺マシケレ  
諸國ノ軍勢等此命ヲ聞テ勇ミ進マヌ者ハナシ夜旣ニ明ケレハ三石松  
尾水飲ヨリ三手ニ分レテ二十萬騎大刀長刀ノ鋒ヲ雙ヘ射向ノ袖ヲ差  
カサシテエイヤ聲ヲ出シテ上リタリケル先一番ニ中書王ノ副將軍ニ  
憑マレタリケル千種宰相中將忠顯卿坊門少將正忠三百餘騎ニテ防カ  
レケルカ松尾ヨリ攻上ル敵ニ後ヲ裏マレテ一人モ殘ラス討レテケリ  
是ヲ見テ後陣ニ支テ防キケル護正院禪智坊道場坊以下ノ衆徒七千餘  
人一太刀打テハ引上暫ク支テハ引退次第々々ニ引ケル間寄手彌勝ニ



乗テ追立々々一息モ繼セスサシモ嶮シキ雲母坂蛇池ヲ弓手ニ見成テ大嶽マテソ攻上リケル略中寄手ノ大勢進兼テ四明ノ巔西谷口今三町許ニ見上テ一息休テソ支ヘケル爰ニ何者カシタリケン大講堂ノ鍾ヲ鳴シテ事ノ急ヲ告タリケル間篠峯ヲ固メントテ昨日横川ヘ向ハレタリケル宇都宮五百餘騎鞭ニ鎧ヲ合テ西谷口ヘ馳來ル皇居ヲ守護シテ東坂本ニオハセラレケル新田左中將義貞六千餘騎ヲ率シテ四明ノ上ヘ馳上リ紀清兩黨ヲ虎韜ニス、マセ江田大館ヲ魚鱗ニ連子テ眞倒ニ懸立ラレケルニ奇手二十萬騎ノ兵共水飲ノ南北ノ谷ニ懸落サレテ人馬イヤカ上ニ落重リシカハサシモ深キ谷ニツ死人ニ埋リテ平地ニナル寄手此日ノ合戦ニ討負テ相圖ノ支度相違シケレハ水飲ヨリ下ニ陣ヲ取テ敵ノ隙ヲ伺フ義貞ハ東坂本ヲ閣テ大嶽ニ陣ヲ取晝夜且暮ニ戦テ互ニ陣ヲ破ラレス西坂ノ合戦此儘ニテ息ヌ

梅松論云山上を責らるへきとて六月五日細川の人々先陣として西坂

本より合戦初皆歩行にて雲母坂まで責よりし此時千種殿討死キ敵は大嶽の上に陣をとる御方は山の中のまけくを過て支へたる下御所大將として御陣は赤山の社の前也山上をは三手にてを責られし今路越をハ三井寺法師旬中大手の雲母坂は細川の人々四國勢並に惣軍勢横川通り篠峯は太宰少貳頼尙九國の輩發向し毎日合戦有けるに御方の戦利に見へし時は三井寺法師松明を用意モこれは山門放火の爲かどう覺へし淺間しかりしこと、もなり

勢州社家文書載

今度合戦事今明折角也早於堂寺之寶前令讀誦同音觀音經並千手陀羅尼可抽丹誠之由可令披露滿寺之狀如件

建武三年六月七日

源朝臣判

清水寺執行法師御房

八日壬午西坂合戦 清閑寺衆徒可致軍忠旨被命彼寺 給御書被賞嶋津周



## 防八郎戰

サケトレ

太平記云其翌日高豐前守大津へ使ヲ立テ宗徒ノ敵共ハ皆大嶽へ向タ  
リト見ヘテ候急追手ノ合戰ヲ始ラレテ東坂本ヲ攻破リ神社佛閣僧坊  
民屋ニ至マテ一字モ殘ラス燒拂テ敵ヲ山上ニ追上セ東西兩塔ノ間ニ  
打上テ煙ヲ舉ラレ候ハ、大嶽ノ敵トモ前後ニ心ヲ迷ハシテ進退定テ  
度ヲ失ツト覺候其時此方ヨリ同攻上戰ノ雌雄ヲ一時ニ決スヘシトソ  
牒セラレケル吉良石堂仁木細川ノ人々はヲ聞テ昨日ハ既ニ追手ノ勸  
ニ依テ高家ノ一族共手詰ノ合戰ヲ致シツ今日ハ又搦手ヨリ此陣ノ合  
戰ヲ勸ラル、事誠ニ理ニ當レリ默スヘキニ非ストテ十八萬騎ヲ三手  
ニ分テ田中濱道山傍ヨリ態夕日ニ敵ヲ向テ東坂本ヘソ寄タリケル城  
中ノ大將ニハ義貞ノ舍弟脇屋右衛門佐義助ヲ置レタリケレハ東國四國  
ノ強弓手垂ヲ汰ヘテ土矢間櫓ノ上ニヲキ土居得能仁科春日部伯耆守以  
下ノ四國北國ノ懸武者共二萬餘騎白鳥岡ニ控ヘサセ船軍ニ習タル國

々ノ兵共ニ和仁堅田ノ地下人共ヲ差添テ五千餘人兵船七百餘艘ニカ  
イ楯ヲカイテ湖水ノ澳ニ浮ヘラレタリ敵陣ノ構密クシテ人ノ近ツク  
ヘキ様ナシトイヘトモ軍ヲセテハ敵ノ落ヘキ様ヤアルトテ三方ノ寄  
手八十萬騎相近ツキテ関ヲ作りケレハ城中ノ勢六萬餘騎矢間板ヲ鳴  
シ舷ヲ扣テ関ヲ合ス大地モ是カ爲ニ裂大山モ此時ニ崩レヤスラント  
夥シ寄手既ニ堀ノ前マテチカツキ寄埋草ヲ以テ堀ヲウメ燒草ヲ積テ  
燒落サントシケル時三百餘箇所ノ櫓土矢間出堀ノ内ヨリ雨ノ降如ク  
射出シケル矢更ニアタ矢一ツモ無リケレハ楯ノハツレ旗ノ下ニ射伏  
ラレテ死生ノ境ヲ知サル者三千人ニ餘レリ寄手餘ニ射殺サレケル間  
持楯ノ陰ニ隱ント少シ色メキタル處ヲ城中ヨリ見澄シテ脇屋堀口江  
田大館ノ人々六千餘騎三ノ城戸ヲ開セテ驀地ニ敵ノ中へ懸入土居得  
能仁科伯耆カ勢二千餘騎白鳥ヨリ懸下テ横合ニアフ湖水ニ泛ヘル國  
々ノ兵共辛崎一松ノ邊へ漕寄テ指矢遠矢直違矢ニ矢種ヲ惜マス射タ



リケル寄手大勢也トイヘトモ山ト海ト横矢ニ射シラマサレ田中白鳥ノ官軍ニ懸立ラレ叶ハシトヤ思ヒケン又本陣ヘ引返ス其後ヨリハ日夜朝暮ニ兵ヲ出シ矢軍計ヲハシケレトモ寄手ハ遠攻ニシタル計ヲ業ニシ官軍ハ城ヲ落サルヲ勝ニシテハカハカシキ軍ハ無カリケリ伊勢家下知狀載

義貞以下凶徒誅伐事警固久々目路阿彌陀峰可致軍忠也次祈禱事令抽丹誠之條被感恩食之狀如件

建武三年六月八日

等寺院殿 御判

清閑寺衆徒中

清閑寺執行僧都御房 文言同前

嶋津文書載

於赤松城致軍忠云々尤神妙河上凶徒誅伐事不日馳向致軍忠者可令抽賞之狀如件

建武三年六月八日

御判

周防八郎殿

九日癸未坂東諸勢可馳參京都由從左典厩傳檄於岩松三郎許

正木文書載

美濃尾張伊賀伊勢志摩近江國軍勢等事可馳向東坂本旨先達雖爲仰候西坂本合戰最中也隨令渡勢多河相分人數不廻時刻可催進京都陳之狀如件

建武三年六月九日

直義判

岩松三郎殿

十三日丁亥依新田以下誅伐事給御書於河野對馬入道

河野文書載

新田義貞己下凶徒等誅伐事依被下院宣雖差遣軍勢義貞等逃籠山門合戰既經數日畢然間方方偏ニ所被憑思召也不廻時日燒拂東坂本令



追伐凶徒者可爲拔群之軍功之旨急速可被抽賞之狀如件

建武三年六月十三日

尊氏御判

河野對馬入道殿

十四日<sup>戊子</sup>依佐々木佐渡入道參着可具勢多渡舟旨直義朝臣被命園城寺衆徒伊豫國御家人可馳參由被令於河野對馬入道

古證文載

勢多渡舟事佐々木佐渡判官入道率美濃尾張軍勢參着勢多令早用意舟不廻時刻可渡彼軍勢若及遲々者可爲難澁之間無緩怠調彼舟早々可越渡軍勢之狀如件

建武三年六月十四日

直義判

園城寺衆徒御中

河野文書載

新田義貞已下凶徒等誅伐事依被下院宣可發向東坂本之由被仰候早相

催一族並伊豫國地頭御家人等不廻時刻經鞍馬口可致軍忠之狀如件

建武三年六月十四日

御判

河野對馬入道殿

十五日<sup>己丑</sup>奉迎新院鳳駕於東寺御陣 以河內國楠正成舊領被寄東寺公卿補任云六月十五日新院親王入御東寺東軍同奉仕皇年代畧記云十六日還御六條殿自彼又幸東寺

東寺文書載

寄附東寺

河內國新開庄<sup>正成</sup>跡事

右爲天下泰平家門繁榮所寄附之狀如件

建武三年六月十五日

等持院殿源朝臣御判

十七日<sup>辛卯</sup>西坂合戰

太平記云同十六日熊野ノ入庄司共五百餘騎ニテ上洛シタリケルカ新



手ナレハ一軍セントテ聽テ西坂ヘソ向ヒタリケル黒絲ノ鎧兜ニ指ノ  
 サキマテ鎌リタル籠手隨當半頰膝鎧透處ナク一樣ニ褰ツレタル事カ  
 ラ誠ニ尋常ノ兵共ノ出立タル體ニハ事替テ物ノ用ニ立ヌト見ヘケレ  
 ハ高豐前守悅思フ事斜ナラス聽テ對面シテ合戰ノ意見ヲ問ケレハ湯  
 河庄司殊更進出テ申ケルハ紀伊國ソダチノ者共ハ幼キヨリ惡處巖石  
 ニ習テ鷹ヲツカヒ狩ヲ仕ル者ニテ候間馬ノ通候ハヌ程ノ嶮岨ヲモ平  
 地ノ如クニ存スルニテ候マシテヤ申サン此山ナトヲ見テ難所ナリト  
 思フ事ハ露計モ候マシ威毛コソ好モ候ハ子共我等カ手ツカラダメ拵  
 テ候物具ヲハ如何ナル筑紫ノ八郎殿モ左右ナク裏カ、スル程ノ事ハ  
 ヨモ候ハシ將軍ノ御大事此時ニテ候ヘハ我等武士ノ矢面ニ立テ敵矢  
 ヲ射ハ物具ニ受留斬ハ其太刀長刀ニ取附敵ノ中ヘワリ入程ナラハ如  
 何ナル新田殿ナリ共ヤワカコラヘラレ候ヘキト傍若無人ニ申セハ聞  
 人見人何レモ偏執ノ思ヒヲ成ニケリサラハ聽テ是ヲサキ武者トシテ

攻ヨトテ六月十七日辰刻ニ二十萬騎ノ大勢熊野八庄司カ五百餘人ヲ  
 先ニ立テ松尾坂ノ尾崎ヨリカツキツレテソ上リタリケル中跡ニツ、  
 キケル熊野勢五百餘人此矢二筋ヲ見テ前ヘモ進マス後ヘモ歸ラス皆  
 背ヲク、メテソ立タリケル本間ト相馬ト二人ナカラ是ヲハ少モ見ヌ  
 由ニテ御方ノ兵ノ二町許隔タリケル向ノ尾ニ陣ヲ取テ居タリケルニ  
 向テ例ナラス敵共ノ働キ候ハ軍ノ候ハンスルヤランナラシニ一矢ツ  
 、射テ見候ハン何ニテモ的ニ立セ給ヘト云ケレハ是遊ハシ候ヘトテ  
 皆紅ノ扇ニ月出シタルヲ矢ニ挾テ遠的場タテニソ立タリケル本間ハ  
 前ニ立相馬ハ後ニ立テ月ヲ射ハ天ノ恐レモ有ヌヘシ兩方ノハツレヲ  
 射ントスルソト約束シテ本間ハタト射レハ相馬モハタト射ル矢所約  
 東ニ違ハス中ナル月ヲソ殘シケル其後百矢二腰取寄テ張カヘノ弓ノ  
 スヒキシテ相摸國住人本間孫四郎資氏下總國住人相馬四郎左衛門尉  
 忠重二人此陣ヲ固メテ候ソ矢少々ウケテ物ノ具ノ札ノ程御覽候ヘト



高ラカニ名乗ケレハ後ナル寄手二十萬騎誰追トシモ無レトモ我先ニ  
トフタメキテ又本ノ陣ヘ引返ス

武藤系圖云賴村忠隈八郎建武五年六月十三日於叡山西坂本討死了

十八日<sup>壬辰</sup>依山徒金輪院光澄指導高師重發兵襲敵營無利

太平記云山徒金輪院律師光澄カ許ヨリ今木少納言隆賢ト申ケル同宿  
ヲ使ニテ高豐前守ニ申ケルハ新田殿ノ支ヘラレ候四明山ノ下ハ山上  
第一ノ難所ニテ候ヘハ輒攻破ラレン事叶難シトソ存候ヘ能物習テ候  
ハンスル西國方ノ兵ヲ四五百人此隆賢ニ相副ラレ無動寺ノ方ヨリ忍  
入文珠樓ノ邊四王院ノ傍ニテ鬨聲ヲ揚ラレ候ハ、光澄與力ノ衆徒東西  
兩塔ノ間ニ旗ヲ舉鬨ヲ合テ山門ヲハ時ノ間ニ攻落シ候ヘシトソ申ケ  
ルアハレ山徒ノ中ニ御方スル者一人ナリ共出來レヨカシト念願シケ  
ル處ニ隆賢忍ヤカニ來夜討スヘキ様申ケレハ高豐前守大ニ喜テ播磨  
美作備前備中四箇國ノ勢ノ中ヨリ夜討ニ慣タル兵五百餘人ヲ勝リテ

六月十八日ノ夕鬨ニ四明ノ巔ヘソ上セケル隆賢多年ノ案内者ナル上  
敵ノ有所無所委見置タル事ナレハ少モ道ニ迷フヘキニテハ無リケル  
カ天罰ニテヤ有ケン俄ニ目昏心迷テ終夜四明ノ麓ヲ北南ヘ迷アリキ  
ケル程ニ夜旣ニ明ケレハ紀清兩黨ニ見附ラレテ中ニ取籠ラレケル間  
後ナル武者共百餘人討レテ谷底ヘ皆コロヒ落ヌ隆賢一人ハ深手數箇  
所負テ腹ヲ切ントシケルカ上帶ヲ解隙ニ組レテ生虜レニケリ

廿日<sup>甲午</sup>今道合戰諸軍敗績高豐前守師重被擒左典厩退陣三條坊門左武衛  
退陣東寺 多田民部賴氏戰死

太平記云山門ニハ西坂ニ軍アラハ本院ノ鐘ヲ撞東坂本ニ合戰アラハ  
生源寺ノ鐘ヲ鳴スヘシト方々ノ約束ヲ定タリケル爰ニ六月二十日ノ  
早且ニ早尾社ノ猿トモ數多群來テ生源寺ノ鐘ヲ東西兩塔ニ響渡ル程  
コソ撞タリケレ諸方ノ官軍九院ノ衆徒是ヲ聞テスハヤ相圖ノ鐘ヲ鳴  
スサラハ攻口ヘ馳向テ防カントテ我劣ラシト渡リ合フ東西ノ寄手此



有様ヲ見テ山ヨリ逆寄ニ寄スルソト心得テ水飲今路八瀬藪里志賀辛  
 崎大津松本ノ寄手共楯ヨ物具ヨト周章色メキケル間官軍是ニ利ヲ得  
 テ山上坂本ノ勢十萬餘騎城戸ヲ開逆茂木ヲ引ノケテ打テ出タリケル  
 寄手ノ大將蹈留リテ敵ハ小勢ソ引テ討ルナキタナシ返セト下知シテ  
 暫支タリケレ共引立タル大勢ナレハ一足モ留ラス脇屋右衛門佐義助  
 兵五千餘騎志賀ノ閻魔堂ノ邊ニ在ケル敵ノ向城五百箇所ノ東西ニ火  
 ナ懸テ喚叫テ揉タリケル敵陣爰ヨリ破レテ寄手ノ百八十萬騎サシモ  
 峻シキ今路古道音無瀧白鳥三石大嶽ヨリ人雪類チツカセテソ逃タリ  
 ケル谷深クシテ行前ツマリタル所ナレハ人馬上カ上ニ落重テ死ケル  
 有様ハ傳聞治承ノ古平家十萬餘騎ノ兵木曾カ夜討ニ驅立ラレテ俱利  
 伽羅谷ニ埋レケルモ是ニハ過シト覺ヘタリ大將高豊前守ハ太股ヲ我  
 太刀ニツキ貫テ引兼タリケルヲ舟田長門守カ手ノ者是ヲ生虜白晝ニ  
 東坂本ヲ渡シ大將新田左中將ノ前ニ面縛ス是ハ佛敵神敵ノ最タレハ

重衡卿ノ例ニ任スヘシトテ山門ノ大衆是ヲ申請テ即辛崎ノ濱ニ首ヲ  
 刎テソ懸ラレケル

梅松論云六月二十日今道越より味方の合戦討負て三手の味方おなじ  
 く坂本に追下さる爰に高豊前守以下數十人山上にして討死す此上は  
 赤山の御陣無益なりとていろき御勢洛中に引退く大將下御所ハ三條  
 坊門御所に御座有將軍は東寺を城郭にかまへ皇居として警固申され  
 けり去春兩將浮勢よて河原に御控ありしゆへに軍勢の心揃はず今度  
 は縦合戦難儀に及といへとも何の輩う東寺を捨ててまつるへきとろ  
 沙汰ありける軍勢は洛中に充滿して狼籍防へからず

多田系圖云頼氏治部大輔政義子二郎左衛門尉民部少輔從五位上建武  
 三年六月廿日於山門無動寺一城戸爲尊氏將軍味方被討

廿一日乙未諏訪部三郎入道信惠捧軍忠目安  
 三戸屋文書載



出雲國三刀屋郷因幡國玉出保等地頭諏訪部三郎入道信惠申候去十九日今在家作道御合戰度々懸先攻落御敵致隨分軍忠之條侍所爲御前之間御見知畢然者早下賜御判可備後證之由相存候以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年六月廿一日

沙彌信惠

進上 御奉行所

承了 高越後守師泰判

廿九日卯癸傳檄於高野山衆徒被令凶徒誅伐事

高野山文書載

新田義貞已下凶徒等誅伐事參御方致軍忠者於舊領可有其沙汰之狀如件

建武三年六月廿九日

尊氏

高野山衆徒中

晦日辰甲洛中合戰豐前國人草野左近將監討取官軍名和伯耆守長年

太平記云山門ニハ京中無勢ナリト聞テ六月晦日十萬餘騎ヲ二手ニ分テ今路西坂ヨリソ寄タリケル將軍始ハ態小勢ヲ河原へ出シテ矢一筋射違へテ引セラレケル間千葉宇都宮土居得能仁科高梨カ勢勝ニ乗テ京中へ追懸テ攻入飽マテ敵ヲ近付テ後東寺ヨリ用意ノ兵五十萬餘騎ヲ出シテ豎小路横小路ニ機變ノ陣ヲ張敵ヲ東西南北ヨリ押隔テ四方ニ當リ八方ニ圍テ餘サシト戰フ寄手片時カ間ニ五百餘人討レテ西坂ヲ差テ引返スサテコソ京勢ハ又勢ニ乘リ山門方ハ力ヲ落シテ牛角ノ戰ニ成ニケリ

梅松論云去程に山の勢洛中へ寄來るよし虚騒き繁かりし間兼日手分有て先細川の人々四國の勢を召具して内野ニ陣をとる法成寺河原ニは師直を大將として大勢を相したかへて相待所に六月晦日拂曉に義貞大將として大勢内野の細川の人々の陣へ寄來る身命を捨て戦ふと



いへとも打負て洛中へ引退く處に敵二手に成て大宮猪熊を下りに所々火を擧る同時に師直の陣法成寺河原に於て合戦ありしに味方打勝けりかゝる所に下御所大將として三條河原に打立て御覽しけるに既に敵東寺近く八條坊門邊迄亂入煙見へし間將軍の御座覺束あしとて御發向あるへきよし申輩多かりける所に太宰少貳頼尙か陣は綾小路大宮の長者連遠か宿所にてそありける頼尙の勢ハ三條河原に馳集りて何方にても將軍の命をうけてむかふへきよし兼て約束の間彼河原に二千騎打立て頼尙申けるは東寺に勇士多く屬し奉る間假令敵堀鹿垣に附とも何事かあらん御合力のためなりとも御馬の鼻を東寺へむけられハ北にむかふ師直の河原の合戦難儀さるへし是非に就て今日ハ御馬を一足も動さるへからず先頼尙東寺へ參るへしとて三條を西へむかふ所に敵大宮ハ新田義貞猪熊は伯耆守長年二手にて八條坊門まで攻下りさりし間東寺の小門を開て仁木頼章上杉伊豆守重能以

下打て出攻戦ふに依て一支もさへへきして敵本の路を二手にて引上る處に細川の人々頼尙洛中の條里を懸切々々戦ひしほとに伯耆守長年三條猪熊に於て豊前國の住人草野左近將監か爲に討とられぬ義貞には細川卿公定禪目を懸て度々相近付既に義貞危く見へしかとも一人當千の勇士とも下塞て命に替り討死せし間二三百騎に打あされて長坂にかゝりて引とる聞へし南ハ畿内の敵作り道より寄來りしを越後守師泰即時に追散し大將討とり宇治よりは法性寺邊まで攻入たりしを細川源藏人頼春内野の手なりしを召ぬかれて大將として菅谷邊まで合戦せしめ打散しける竹田ハ今川駿河守頼貞大將として丹波但馬の勢馳向て追落す六月晦日數箇所の合戦ことごとく未の刻以前に打勝ける七月朔日三條河原よ於て首の實檢あり數千餘とる聞へし云々

名和系圖云長年長田小太郎行高子長田又太郎伯耆太守東市正村上太



郎左衛門尉從四位下本名長高依後醍醐天皇勅定元弘三年閏二月廿九日夜被任左衛門尉被下年字同三月三日伯耆國被宛下號從四位下村上伯耆守長年御治世之後因幡國被宛下因伯兩國之成主建武三年六月晦七月十三日京於內野自害法名釋阿

那波系圖云信貞小三郎行貞子小三郎イ太因幡守左衛門尉建武三年六月晦日於京六角猪熊神本三郎太郎兼繼カ爲ニ討死

此月叡山僧徒奉勅命贈牒狀於南都興福寺通謀斷當手漕路

太平記云官軍兩度ノ軍ニ打負テ氣疲レ勢薄ク成テケレハ山上坂本ニ如何ナル野心ノ者カ出來テ不慮ノ儀アランスラント主上玉辰ヲ安クシ給ハス叡襟ヲ傾ケサセ給ヒケレハ先叡徒ノ心ヲ勇シメン爲ニ七社ノ靈神九院ノ佛閣へ各大庄二三箇所ツ、寄附セラル其外一所住トテ衆徒八百餘人早尾ニ群集シテ軍勢ノ兵糧已下ノ事取沙汰シケル衆ノ中へ江州ノ闕所分三百餘箇所ヲ行ハレテ當國ノ國衙ヲ山門永代管領

スヘキ由承ク宣旨ヲ成レテ補任セラル中同十七日三千ノ衆徒大講堂ノ大庭ニ三塔會合シテ僉議シケルハ夫レ吾山者當王城之鬼門爲神德之靈地是以保百王之寶祚依一山之懇誠鎮四夷之擾亂唯任七社之擁護爰有源家餘裔尊氏直義者將傾王化亡佛法訪大逆於異國祿山比不堪尋積惡於本朝守屋却可淺抑普天之下無不王土縱雖爲釋門之徒此時盡盡致命之忠義故北嶺天子本命之伽藍也仍運朝廷輔危之計畧南都博陸股肱之氏寺也須救藤氏累家之淹屈然早牒送東大興福兩寺可被結義戰勳力之一諾三千一同ニ僉議シテ則南都へ牒狀ヲ送ケル其詞云  
延曆寺牒興福寺衙

請早運兩寺一味籌策追罰朝敵源尊氏直義以下逆徒彌致佛法王法昌榮狀

牒佛法傳吾邦兮七百餘歲祝皇統益蒼生者法相圓頓之秘蹟最勝神明垂權跡兮七千餘座鎮寶祚耀威光者四所三聖之靈驗異他是以先者淡



海公建興福寺以瑩八識五重之明鏡後日桓武帝開比叡山以挑四教三觀之法燈爾降南都北嶺共掌護國護王之精祈天台法相互究權教實教之奧旨寔是以佛法守王法濫觴以王法弘佛法根源也因茲當山有愁之時通白疏而談懇情朝家有故之日同丹心而祈安靜五六年以來天下大亂民間不靜就中尊氏直義等起自邊鄙之酋長飽浴超涯之皇澤未知君臣之道忽有豺狼之心樹黨而誘引戎虜矯詔而賊害藩籬熟思王業再興之聖運更非尊氏一人之武功企叛逆無其辭以義貞稱其敵貪天功而爲己力咎犯之所耻也假晁錯而舉逆謀劉濞之所亡也爲臣犯君忘恩背義開闢以來未聞其跡遂乃孟春之初猛火甚於燎原九重之城闕成灰燼暴風扇于區宇無辜之黎民墮塗炭論其積惡誰不歎息且爲避當時之災孽且爲仰和光之神助廻仙蹕於七社之瑞籬任安全於四明之懇府衆徒之心此時敢乎爰三千一揆忘身命扶義兵老少同心代冥威伏異賊王道未衰神感潛通之故逆黨卷旗而奔西凶徒倒戈而敗北喻猶紅爐之消雪相

似團石之壓卵昔晉之祈八公也早覆苻堅之兵唐之感四王也乍郤吐蕃之陣蓋乃斯謂歟遂使儼鸞輿之威儀促鳳城之還幸天掃攬槍上下同見慶雲之色海剪鯨鯢遠近盡歎逆浪之聲併是學侶教侶之精誠也豈非醫王山王之加護哉而今賊黨再窺覲帝城官軍暫彷徨征途仍慣先度朝儀重及當社臨幸山上山下興廢只在此時佛法王法盛衰豈非今日乎天台之教法七社之靈鑿偏共安危於朝廷法相之護持四所之冥應蓋加蟲負於國家貴寺若存報國之忠貞者衆徒須運輔君之計畧矣滿山之愁訴猶通音問而成合體一朝之治亂何隨群議而無與力乃仍勒事由牒送如件勿敢猶豫故牒

延元元年六月

延曆寺三千衆徒等

トソ書レタル牒狀披閱ノ後南都大衆則山門ニ同心シテ返牒ヲ送ル其狀云

興福寺衆徒牒延曆寺衙



來牒一紙被載尊氏直義等征伐事

牒夫觀行五品之居勝位也學圓頓於河淮之流等覺無垢之因上果也敷了義於印度之境是以隋高祖崇玄文玉泉水清唐文皇奮神藻瑤花風芳遂使一夏敷揚之輿頤遙傳于叡山三國相承之真宗獨留于吾寺以降時及千祀軌垂百王寔是弘佛法之宏規護皇基之洪緒者也彼尊氏直義等遠蠻之亡虜東夷之降率也雖非鷹犬之才屢忝爪牙之任乍忘朝弊還挿野心討揚氏兮爲辭在藩溪兮作逆劫畧州縣掠虜吏民帝都悉燒殘佛閣多魔滅軼赤眉之入咸陽超黃巾之寇河北濫吹之甚自古未聞天誅所覃冥譴何逃因茲去春之初鋤耨棘矜一摧關中焉匹馬隻輪纒遁海西矣今聚其敗軍擁彼餘衆不恐雷霆之威重待斧鉞之罪六軍徘徊群兇益振是則孟津再駕之役獨夫所亡也城濮三舍之謀侍臣所敗也夫違天者有大咎失道者其助寡積暴之勢豈又能久乎方今廻皇輿於花洛之外張軍幕於猶溪之邊三千群侶定合懇祈之掌七社靈神鎮廻擁護之眸者歟彼代

宗之屯長安也觀師於香積寺之中勾踐之在會稽也陳兵於天台山之北事協先蹤寧非佳摸乎爰當寺衆徒等自翠華北幸抽丹棘於中庭專祈寶祚之長久只期妖孽之滅亡精誠無貳冥助豈空乎就中寺邊之若輩國中

之勇士頗有加官軍之志屢運退凶賊之策然而南北境阻風馬之蹄不及山川地殊雲鳥之勢難接矣矧亦賊徒構謀寇迫松壩之下人心未和禍在蕭牆之中前對燕然之虜後有宛城之軍攻守之間進退失度但綸命屢降牒狀難默速率銳師早征凶黨今以狀牒々到准狀故牒

延元元年六月日

興福寺六方大衆徒等

トソ書タリケル南都興福寺已ニ山門ニ與力シヌト聞ヘケレハ畿内近國ニ軍ノ勝負ヲ計カ子テ何方ヘカ着ヘキト案シ煩ヒケル兵共皆山門ニ志ヲ通シ力ヲ合ハセントス然トイヘトモ境敵陣ヲ隔テケレハ坂本ヘ馳參事叶フヘカラス大將ヲ賜リテ陣ヲ取テ京都ヲ攻落シ候ヘシトソ申ケルサラハトテ八幡ヘハ四條中納言隆資卿ヲ差遣サル眞木葛葉



禁野片野宇殿賀島神崎天王寺賀茂三日原ノ者共馳集テ三千餘騎大渡ノ橋ヨリ西ニ陣ヲ取テ川尻ノ道ヲ差塞ク宇治ヘハ中院中將定平ヲ遣サル宇治田原醍醐小栗栖木津梨間市野邊山城脇者共馳集テ二千餘騎宇治橋二三間引落シ橋小島カ崎ニ陣ヲ取北丹波道ヘハ大覺寺宮ヲ大將トシ奉リテ額田左馬助ヲ遣サル其勢三百餘騎白晝ニ京中ヲ打通テ長坂ニ打上ル嵯嵯仁和寺高雄榑尾志宇知山内芋毛村雲ノ者共馳集テ千餘騎京中ヲ足ノ下ニ見下シテ京見峠嵐山高尾榑尾ニ陣ヲ取此外鞍馬道ヲハ西塔ヨリ塞テ勢多ヲハ愛智信樂ヨリ指塞ク今ハ四方七ツノ道纔ニ唐櫃越計アキタレハ國々ノ運送道絶テ洛中ノ士卒兵糧ニ疲レタリ暫ハ馬ヲ賣物具ヲ沽口中ノ食ヲ繼ケルカ後ニハ京白川ノ在家寺々ヘ打入テ衣裳ヲ剝取食物ヲ奪ヒ食卿相雲客モ兵火ノ爲ニ焼出サレテ此ノ辻堂彼ノ拜殿ニ身ヲ側メ僧俗男女ハ道ニ食ヲ乞テ築地ノ陰唐居敷ノ上ニ飢伏開闢ヨリ以來兵革ノ起ル事多シトイヘトモ是程ノ無

道ハイマタ記セサル處ナリ



後鑑卷之十四

尊氏將軍記第四之七 建武三年七月

建武三年 丙子

七月小

朔日 乙巳 以山城國久世庄寄附東寺八幡宮 令建伊豫國觀念寺制札

東寺文書載

寄附

東寺八幡宮

山城國久世庄上下地頭職事

右爲天下泰平國家安寧所寄進也者守先例可 致沙汰之狀如件

建武三年七月一日

等持院殿源朝臣御判

豫州松山舊記載

觀念寺 尊氏在判



右軍勢以下甲乙人等於致亂入狼籍之輩可處重科之狀如件

建武三年七月一日

五日己酉重傳凶徒誅伐御書於小笠原信濃寺及高野山衆徒

小笠原文書載

新田義貞以下凶徒等事度々合戰每度打勝畢就中去月晦日寄來之間伯耆守長年並餘黨數千人或討取之或取之間山門之軍勢相殘之分不幾之上今朝多以沒落將又爲降人所參也爰如風聞者義貞以下可令沒落東國云云自東國山道令馳參輩暫令居住近江國打止湖舟之往反及兵糧可打取沒落軍勢之由可相觸山道海道等勢之條如件

建武三年七月五日

尊氏御判

小笠原信濃守殿

高野山文書載

新田義貞以下凶徒等誅伐事被成院宣早馳參御方可致合力狀如件

建武三年七月五日

尊氏

高野山衆徒中

七日辛亥是日於石見國大內弘直伏誅

大內多々良氏譜牒云弘直瑞雲寺殿惠海淨 建武三年七月七日於石見

益田大山依將軍尊氏命被誅

八日壬子洛中合戰官軍敗走

太平記云二條大納言師基卿北國ヨリ敷地上木山岸瓜生河島深町以下ノ者三千餘騎ヲ率シヲ七月五日東坂本へ着給フ山門是ニ又力ヲ得テ同十八日京都へソ寄ラレケル前ニハ京中ヲ經テ遙々ト東寺マテ寄レハコソ小路キリニ前後左右ノ敵ヲ防キ兼テ其圍ヲハ破カ子ツレ此度ハ一勢ハ二條ヲ西へ内野へカケ出テ大宮ヲ下リニ押寄セ一勢ハ河原ヲ下リニ押寄東西ヨリ京ヲ中ニ挾テ燒攻ニスヘシトソ議セラレケル此謀如何ナル野心ノ者カ京都へ告タリケン將軍是ヲ聞スマシテケレ



ハ六十萬騎ノ勢ヲ三手ニ分二十萬騎ヲハ東山ト七條河原ニ置レタリ  
 是ハ河原ヨリ寄ニスル敵ヲ東西ヨリ却テ中ニ取籠ン爲ナリ二十萬騎  
 ナハ船岡山ノ麓神祇官ノ南ニ隱シ置レタリ是ハ内野ヨリ寄ニスル敵  
 ナ南北ヨリ引裏マン爲ナリ殘ル二十萬騎ヲハ西八條東寺ノ邊ニ控ヘ  
 サセテ軍門ノ前ニ置レタリ是ハ諸方ノ陣強シテ懸散サレハ新手ニ替  
 ラン爲ナリ去程ニ明レハ十八日卯刻ニ山門ノ勢北白河八瀬藪里下松  
 修學院ノ前ニ押寄テ東西二陣ノ手ヲ分ツ新田ノ一族五萬餘騎ハ糺杜  
 ナ南ニ見テ紫野ヲ内野ヘ懸通ル二條師基卿千葉介宇都宮仁科高梨眞  
 如堂ヲ西ヘ打過テ河原ヲ下リニ押寄ル其手ノ足輕共走散京中ノ在家  
 數百箇所ニ火ヲ懸タリケレハ猛火天ニ滿翻リテ黑煙四方ニ吹覆フ五  
 條河原ヨリ軍始リテ射矢ハ雨ノ如ク劔戟電ノ如シ聽テ内野ニモ合戰  
 始リテ右近馬場ノ東西神祇官ノ南北ニ汗馬ノ馳違フ音闕ニ相交リテ  
 只百千ノ雷ノ大地ニ震フカ如クナリ暫有テ五條河原ノ寄手一戰ニ討

負テ引タリケル程ニ内野ノ大勢彌重リテ新田左中將兄弟ノ勢ヲ十重  
 二十重ニ取卷テ喚叫テ攻戰フサレトモ義貞ノ兵トモ元來機變磬控百  
 鍛千鍊シテ己カ物ト得タル所ナレハ一舉ニ百重ノ圍ヲ解テ左副右衛  
 一人モ討レス返合々々戰テ又山上ヘ引歸ス

九日<sup>癸丑</sup>給御書於壽命寺被賞僧徒軍功

集古文書載

池田壽命寺僧徒等軍忠殊以神妙也有恩賞之狀如件

建武三年七月九日

十日<sup>甲寅</sup>給御書於嶋津忠兼褒其軍功

嶋津文書載

御判

周防五郎三郎忠兼軍忠神妙可有恩賞之狀如件

建武三年七月十日



十二日丙辰朝倉孫太郎重方捧勳功申文

東寺文書載

朝倉孫太郎日下部重方申猶御方存忠節之間雖被取籠敵陳拔出京都陵海路馳參鎮西之處參會防州釜戶關至攝州兵庫島御供仕訖仍屬御手去五月十八日兵庫湊川御合戰京都度々御合戰之時抽軍功剩子息重光被疵畢御檢知分明之上者給御判欲備後證候以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年七月十二日

日下部重方稟判

進上御奉行所

十六日庚申直義朝臣傳書小笠原信濃守貞宗賞其戰忠

小笠原文書載

昨日十五日注進狀今日十六日午刻到來抑去六日夜於野路篠原打捕山徒成願坊十日於鏡宿并伊吹大平寺兩所致合戰云云軍忠之至殊

以神妙也將又東國軍勢近日可參洛之間勢多橋以下及其沙汰可差遣軍勢猶近江路者相副近江伊勢兩國輩於佐々木佐渡判官入道道譽且追治凶徒且可警固東近江之由被仰下事同誅伐被彼凶徒等早速可入洛之狀如件

建武三年七月十六日

直義判

小笠原信濃守殿

廿日甲子被命御祈禱事于報恩寺被賞託磨五郎幸忠軍功近江國人目賀田入道玄向上軍功申狀

武州文書載

祈禱事可令致精誠之狀如件

建武三年七月廿日

御判

報恩寺長老

細川家臣所藏文書載



大友託磨五郎次郎幸秀軍忠神妙可有恩賞之狀如件

建武三年七月廿日

古證文載

近江國御家人目賀田五郎兵衛入道玄向申軍忠事

去六月廿日東坂本御合戰時懸先仕候間若黨松岡七郎景久討死仕候

了同所合戰之間佐々木加地四郎存知候也次同廿九日醍醐路御敵六

條河原口寄來間追歸之即竹田河原御敵爲後責懸御目合戰仕候了此

上者賜御證判可備龜鑑候以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年七月廿日

進上御奉行所

沙彌玄向 狀

承了判

廿一日<sup>丑</sup>被命凶徒退治事於青木武藏守

青木文書

凶徒等退治事早馳向勢多橋可令致軍忠之狀如件

建武三年七月廿一日

御判

青木武藏守殿

廿二日<sup>丙寅</sup>富田佐渡守師泰卒

佐々木系圖云師泰富田四郎左衛門義泰子佐渡守四郎左衛門母近江太

郎左衛門重綱女正中三年三月十八日出家法名如覺建武三年七月二十

二日死去

廿三日<sup>丁卯</sup>洛中合戰

太平記云七月十三日大將新田左中將義貞度々ノ軍ニ打殘サレタル一

族四十三人引具シテ先皇居へ參セラル主上龍顏麗シク群下ヲ照臨有

テ今日ノ合戰何ヨリモ忠ヲ盡スヘシト仰下サレケレハ義貞士卒ノ意

ニ代リテ合戰ノ雌雄ハ時ノ運ニヨル事ニテ候へハ兼テ勝負ヲ定カタ

ク候但今日ノ軍ニ於テハ尊氏カ籠リテ候東寺ノ中へ箭一ツ射入候ハ

テハ罷歸ルマシキニテ候ナリト申テ御前ヲソ退出セラレケル中京都



ノ合戦ハ十三日巳刻ト兼テ諸方ヘ觸送タリケレハ東坂本ヨリ寄ル勢  
關山今路ノ邊ニ控ヘテ時刻ヲ待ケル處ニ敵ヤ謀リテ火ヲ懸タリケン  
北白川ニ焼亡出來テ煙蒼天ニ充滿タリ八幡ヨリ寄ントスル官方ノ勢  
トモ是ヲ見テスハヤ山門ヨリ寄テ京中ニ火ヲカケタルハ今日ノ軍ニ  
シヲクレハ何ノ面目カ有ヘキトテ相圖ノ刻限ヲモ相待ス其勢纔ニ三  
千餘騎ニテ鳥羽ノ作道ヨリ東寺ノ南大門ノ前ヘソ寄タリケル東寺ノ  
勢ハ山門ヨリ寄ル敵ヲ防ントテ河合北白河ノ邊ヘ皆向タリケレ卿相  
雲客或ハ將軍近習ノ老者兒ナト計集リ居テ此敵ヲ防ヘキ兵ハ更ニナ  
カリケリ寄手ノ足輕トモ鳥羽田ノ面畔ヲツタヒ四塚羅城門ノクロノ  
上ニ立渡リ散々ニ射ケル間作道マテ打出タリケル高武藏守師直カ五  
百餘騎射立ラレテ引退ク敵彌勝ニ乗テ持楯ヒシキ楯ヲツキ寄ツキ寄  
カツキ入テ攻ケル程ニ坤ノ角ナル出堀ノ上ノ高櫓一ツ念ナク攻破ラ  
レテ焼ニケリ城中是ニ躁テ聲々ニヒシメキ合ケレハ將軍ハ些モ驚キ

給ハス鎮守ノ御寶前ニ看經シテオハシケル其前ニ問注所ノ信濃入道  
道大ト土岐伯耆入道存孝二人俱シテ候ケルカ存孝傍ヲキツト見テア  
ハレ愚息ニテ候惡源太ヲ上ノ手ヘ向候ハテ是ニ留テ候ハ、此敵ヲハ  
輒ク追拂ハセ候ハンスル者ヲト申ケル處ニ惡源太ツト參タリ存孝嬉  
シケニ打見テイカニ上ノ手ノ軍ハイマダ始マラヌカイヤソレハイマ  
ダ存知仕ラス候三條河原マテ罷向テ候ツルカ東寺ノ坤ニ當テ煙ノ見  
エ候間取テ返シテ馳參シテ候御方ノ御合戦ハ何ト候ヤラント申ケレ  
ハ武藏守只今作道ノ軍ニ討負テ引退トイヘトモ此御陣ノ兵多カラ子  
ハ入替ル事叶ハス巳ニ坤ノ角ノ出堀ヲ打破ラレテ櫓ヲ燒落サル、上  
ハ將軍ノ御大事此時ナリ一騎ナリトモ御邊打出テ此敵ヲ拂ヘカシ畏  
テ承候トテ惡源太御前ヲ立ケルヲ將軍暫トテイツモ帶副ニシ給ヒケ  
ル御所作ノ兵庫鎌ノ御太刀ヲ引出物ニソセラレケル惡源太此太刀ヲ  
賜リテナトカ心ノ勇サラン洗皮ノ鎧ニ白星ノ兜ノ緒ヲシメテ只今賜



リタル金作ノ太刀ノ上ニ三尺八寸ノ黒塗ノ太刀帶副三十六差タル山鳥ノ引尾ノ征矢森ノ如クニトキミタシ三人張ノ弓ニセキ弦カケテ噛シメシ態鷹當ヲハセサリケリ時々ハ馬ヨリ飛下テ深田ヲ歩マンカ爲ナリケリ北ノ小門ヨリ打出テ羅城門ノ西ヘ打廻リ馬ヲハ畔ノ陰ニ騎放シテ三町餘リカ外ニ群立タル敵ヲ指ツメ引ツメ散々ニソ射タリケル一矢ニ二人三人ヲハ射落セトモアタ矢ハ一ツモ無リケレハ南大門ノ前ニ攻入タル寄手ノ兵千餘人一度ニハツト引退ク惡源太是ニ利ヲ得テ懸足逸物ノ馬ニ打乗サシモ深キ鳥羽田中ヲ眞平地ニ懸立テ敵六騎斬テ落シ十一騎ニ手負セテ仰タル太刀ヲ押直シ東寺ノ方ヲキツト見テ氣色ハウタル有様ハ如何ナル和泉小次郎朝夷那三郎モ是ニハ過シトソ見ヘタリケル惡源太一人ニ懸立ラレテ數萬ノ寄手皆シトロニ成ヌト見ヘケレハ高武藏守師直千餘騎ニテ又作道ヲ下リニ追カクル越後守師泰ハ七百餘騎ニテ竹田ヲ下リニヨコキリ合セントス己ニ引

立タル大勢ナレハナシカハ足ヲ留ムヘキ討ル、ヲモ顧ミス手負ヲモ扶ケス我先ニト逃散テ本ノ八幡ヘ引返シケリ一方ノ寄手ノ破レタルヲモ知ス相圖ノ刻限ヨク成ヌトテ追手ノ大將新田義貞脇屋義助二萬餘騎ヲ率シテ今路西坂本ヨリ下テ三手ニ分レテ押寄ル一手ハ義貞義助江田大館千葉宇都宮其勢一萬餘騎大中黒月ニ星左巴右巴丹兒玉ノ團扇ノ旗三十餘流連リテ糺ヲ西ヘ打通リ大宮ヲ下リニ押寄ラル一手ニハ伯耆守長年仁科高梨土居得能春日部以下ノ國々ノ勢集テ五千餘騎大將義貞ノ旗ヲ守テ鶴翼魚鱗ノ陣ヲナシ猪熊ヲ下リニ推寄ル一手ハ二條大納言洞院左衛門督兩大將ニテ五千餘騎牡丹旗只二流差舉テ敵ニ跡ヲ切レシト四條ヲ東ヘ引渡シテサキヘハ態進マレズ兼テヨリ阿彌陀カ峯ニ陣ヲ取タリシ阿波淡路ノ勢千餘ハイマタ京中ヘハ入ス泉涌寺ノ前今熊野邊マテ居下リテ相圖ノ煙ヲ上タレハ長坂ニ陣ヲ取タル額田カ勢八百餘騎嵯峨仁和寺ノ邊ニ打散所々ニ火ヲ懸タリ京



方ハ大勢ナレトモ人疲レ馬疲レ而モ今朝ノ軍ニ矢種ハ皆射盡シタリ  
寄手ハ小勢ナレトモサシモ名將ノ義貞先日度々ノ軍ニ討負テ此度會  
稽ノ耻ヲ雪ント牙ヲ絞名ヲ耻ト聞ヘヌレハ御治世兩統ノ聖運モ新田  
足利多年ノ憤モ只今日ノ軍ニ定リヌト氣ヲツメヌ人ハ無リケリサル  
程ニ六條大宮ヨリ軍始リテ將軍ノ二十萬騎ト義貞ノ二萬騎ト入亂テ  
戰タリ射違ル矢ハ夕立ノ軒端ヲ過ル音ヨリモ猶滋ク打合太刀ノ鏗音  
ハ空ニ應フル山ヒコノ鳴止隙モ無リケリ京勢ハ小路々々ヲ立塞テ敵  
ヲ東西ヨリ取籠進マハ先ヲ遮リ左右ヘ分レハ中ヲ破ント變化機ニ應  
シテ戰ケレモ義貞ノ兵少モ散ラテ中ヲモ破ラレス退テ跡ヨリモ揉レ  
ス向フ敵ヲ懸立々々大宮ヲ下リニ驀地ニ懸リケル程ニ仁木細川今川  
荒川土岐佐々木逸見武田小早河此ニ打散サレ彼ニ追立ラレ所々ニ控  
ヘケレハ義貞ノ兵二萬餘騎東寺ノ小門ノ前ニ推寄テ一度ニ関ヲトツ  
ト作ル義貞坂本ヲ打出シ時先皇居ニ參テ天下ノ落居ハ聖運ニ任セ候

ヘハ心トスル處ニ候ハス何様今度ノ軍ニ於テハ尊氏カ籠リテ候東寺  
ノ中ヘ矢一ツ射入候ハテハ歸參ルマシキニテ候ト申テ出タリシ其言  
ニ違ハス敵ヲ一的場ノ内ニ攻寄タレハ今ハカフト大ニ悦テ旗ノ陰ニ  
馬ヲ打スヘ城ヲ睨弓杖ニスカツテ高ラカニ宣ヒケルハ天下ノ亂休事  
無シテ罪ナキ人民身ヲ安クセサル事年久シ是國王兩統ノ御爭トハ申  
ナカラ只義貞ト尊氏卿トノ所ニアリ纔ニ一身ノ大功ヲ立ン爲ニ多ク  
ノ人ヲ苦シメンヨリ獨身ニシテ戰ヲ決セント思フ故ニ義貞自ラ此軍  
門ニ罷向テ候ナリソレカアラヌカ矢一ツ受テ知給ヘトテ二人張ニ十  
三束二伏飽マテ堅メテ引シホリ弦音高ク切テ放ツ其矢二重ニカイタ  
ル高櫓ノ上ヲ越テ將軍ノ座シ給ヘル帷幕ノ中本堂ノ良柱ニ一ユリユ  
リテクツマキ過テソ立タリケル將軍是ヲ見給ヒ我此軍ヲ起シテ鎌倉  
ヲ立シヨリ全ク君ヲ傾ケ奉ラント思フニ非ス只義貞ニ逢テ憤ヲ散セ  
ン爲ナリキ然レハ彼ト我ト獨身ニシテ戰ヲ決セン事元來悅所ナリ其



門開ケ打テ出ント宣ヒケルヲ上杉伊豆守是ハ如何ナル御事ニテ候ソ  
楚項羽カ漢高祖ニ向ヒ獨身ニシテ戰ハント申セシヲハ高祖アサ笑テ  
汝ヲ擊ニ刑徒ヲ以テスヘシト欺キ候ハスヤ義貞ソ、ロニ深入シテ引  
方ノナサニ能敵ニヤ遇トフテ、仕候ヲ輕々シク御出アル事ヤ候ヘキ  
思ヒモ寄ヌ御事ニテ候トテ鎧ノ御袖ニ取附ケレハ將軍力ナク義者ノ  
諫ニ從フテ忿ヲ抑ヘテ座シ給フ懸ル處ニ土岐彈正少弼頼遠三百餘騎  
ニテ上賀茂ニ控ヘテ有ケルカ五條大宮ニ控ヘタル旗ヲ見テケレハ大  
將ハ皆公家ノ人々ヨト見テケレハ後ヨリ関ヲトツト作テ喚キ叫テソ  
懸タリケルスハヤ敵後ヨリ取廻シケルハ川原ヘ引テ廣ミテ戰ヘト云  
程コソ有ケレ一戰モ戰ハス五條川原ヘハツト追出サレテ些モ足ヲ踏  
留ス西坂本ヲサシテ逃タリケル土岐頼遠五條大宮ノ合戰ニ打勝テ勝  
関ヲ揚ケレハ此彼ヨリ勢トモ數千騎馳集テ大宮ヲ下リニ義貞ノ後ヘ  
攻寄ル神祇官ニ控ヘタル仁木細川吉良石堂カ勢二萬餘騎ハ朱雀ヲ直

違ニ西八條ヘ推寄ル東ヨリハ少貳大友厚東大内四國中國ノ兵トモ三  
萬餘騎七條河原ヲ下リニ針唐橋ヘ引廻シテ敵ヲ一人モ討洩サス引洩  
サス引裏三方ハ如此百重千重ニ取巻テ天ヲ翔リ地ヲ潛テ出ルヨリ外  
ハ漏テモ逃ヘキ方ハナシ前ニハ城郭堅ク守テ數萬ノ兵鏃ヲ汰ヘテ散  
々ニ射ル義貞今日ヲ限ノ運命ナリト思定給ヒケレハ二萬餘騎ヲ只一  
手ニ成テ八條九條ニ控ヘタル敵十萬餘騎ヲ四角八方ヘ懸散シ三條河  
原ヘ颯ト引テ出タレハ千葉宇都宮モハヤ所々ニ引別レ名和伯耆守長  
年モ懸隔ラレヌト見ヘタリ仁科高梨春日部兒玉三千餘騎一手ニ成テ  
一條ヲ東ヘ引ケルカ三百餘騎討レテ鷲ノ森ヘ懸拔タリ長年ハ二百餘  
騎ニテ大宮ニテ返合セ我ト後ノ城戸ヲサシテ一人モ殘ラス切死ニコ  
ソ死ニケレ其後所々ノ軍ニ勝ホコリタル敵三十萬騎纔ニ打殘サレタ  
ル義貞ノ勢ヲ真中ニ又取籠ル義貞モ思ヒ切タル體ニテ一引モ引ント  
ハシ給ハス馬ヲ皆西頭ニ立テ討死セントシ給ヒケル處ニ主上恩賜ノ



御衣ヲ切テ笠驗ニ附タル兵トモ所々ヨリ馳集リ二千餘騎戰疲タル大敵ヲ懸立々々揉タリケルニ雲霞ノ如クナル敵トモ馬ノ足ヲ立兼テ京中ヘハツト引ケレハ義貞義助江田大館萬死ヲ出テ一生ニ逢又坂本ヘ引返サル

梅松論云八月二十三日の曉より加茂糺河原に於て終日合戦ありしは大將師直身命を捨て戦し程に兩所に創を被る此時分味方の勇士今日を限りと攻戦ふに依て義貞打負て落ける間山の勢多く討にけり難太平記云其頃大御所は東寺の御陣あり先皇は山門に御座なり四方の口々を官方より塞きしかは味方兵糧難儀にて東は關山阿彌陀峰南は宇治路西は老山北は長坂口などに連々大將を遣して破られしに故入道殿阿彌陀峯ニ向て諏訪いまひえの前にて戦ひ有て追拂ひ給ひし時左の肩さきを射られ給ひき其二三日有て又四宮河原に勢を向られけるに重て故入道殿向へれしかは鎧の射向の袖を解て向ひ給ひしに

先坂口には仁木右馬助義長今の右京太夫なり三井寺路巡地藏には故殿向ひ給ひしに義長か云今日は逃れつくの戦なるへしと云けれハ故殿勿論と返事ありき終日兩所合戦に仁木か手退く間相坂の手より伊勢國愛曾といふ大力の者只一騎後より來りけるを前の戦の隙なきに是を知りたまはも故殿の御跡に控へられたる安藝入道殿の兜の鍔を切落しければ落馬なり重てひかへたる範氏の三十六指さる大征矢を拂切にしてけり其時故殿馬を立直して先太刀をせられしに愛曾兜の鉢を破られて馬の卒頸にひらみて太刀にて拂けるに左の御籠手の二の板を切て前なる敵の中に分入にけり其時この戦も止けるなり後に故殿の家人殿村平三といふ者愛曾か知音にてこの兜の鉢とはつふりを取出して見せて今川殿は如何成劔を持給ひてか随分某かためしたる兜とはつふりを破りたまひて鉢巻切れて頭に少し創を被ふりき眼昏く成しかは引退しと語りき其より此太刀を八八王と名つけ給ひし



なり入を二ツ重る故なりとこ仰られしか此太刀も籠手も故總州  
所望して今相傳也太刀ハ國吉か作なり云々

那波系圖云高光伯耆守長年子四郎童名乙童丸建武三年七月於山門西

坂本討死廿二歲

廿六日庚午被仰下凶徒誅伐事於三島大祝許

集古文書載

新田義貞並凶徒等誅伐事被下院宣之間正成長年以下事悉討取候早  
相催一族可致軍忠之狀如件

建武三年七月廿六日

御判

三嶋大祝允

是月多田院御家人森本左衛門次郎爲時及石見國住人御神木三郎太郎兼  
繼齋藤彦七基康諏訪三郎入道信惠天野安藝八郎景光捧軍功申文  
文書載

多田院御家人森本左衛門次郎爲時申軍忠事

五月廿四日當大將御發向野鞍之時率一族野内左衛門尉仲重同四  
郎季延同馬次郎家季同六郎時長同三郎助時同四郎時實同五郎時基  
同八郎時重同孫九郎時任同孫次郎景光同又三郎時信同衛門次郎公  
光同源次郎公時同野五光長同四郎次郎爲延等御供仕致合戰訖同二  
十五日藍庄合戰致忠之段松山宮内左衛門尉所令見及也

一同廿六日御上洛之時御供仕至于同六月四日令勤仕所々警固者也

一同五日御發向山門無動寺時爲時一族四郎季延同馬次郎家季同五郎  
時基同孫次郎景光等相共御供仕經數日致合戰之忠畢此段證人同前  
一同二十七日奧林御座之時率一族四郎同馬次郎同五郎右衛門次郎野  
内左衛門尉代兵衛三郎等馳參當所致警固同七月四日吳庭合戰致忠  
訖證人同前

一同六日尼崎合戰之時一族四郎同五郎同馬次郎同右衛門次郎同孫次



郎同野內左衛門尉代兵衛三郎致合戰忠節之段證人同前  
一同八日安滿繩手合戰之時爲時一族四郎同五郎同馬次郎同右衛門次郎同孫次郎同野內左衛門尉代兵衛三郎相共致合戰忠之段證人同前  
右任度々軍忠之間賜御證判備後證施弓箭之面目彌爲致軍忠粗言上如件

建武三年七月日

進上御奉行所

承了

古證文載

石見國福光上村地頭御神木三郎太郎藤原兼繼申去四月廿六日馳參長門府御上洛御供仕於兵庫島抽軍忠且美作國野介次郎兵衛尉伴合戰之間見及之次去月五日馳向叡山西坂下屬高豐前守手迄同八日晝夜合戰就中同八日兼繼被疵右股是又小笠原野三郎太小笠原孫五郎同時合戰之間見及之仍柄田太貳房并中林次郎入道加疵實檢畢次同晦

日馳參八條坊門猪熊對御敵伯耆守長年致所々合戰於押小路猪熊討取伯耆三郎右衛門尉長年一族畢且備後國三吉孫三郎以下一族伴合戰之間知及之至合戰分取者於加茂河原高新左衛門尉并中林次郎入道令見知上被遂御實檢畢然早下賜御證判可備向後龜鏡候以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年七月日

藤原兼繼

進上御奉行所

尊氏將軍執權高武藏守師直判

諸家文書纂載

齋藤七郎入道玄教子息

彥七基康申軍忠事

右去月一日馳參西山同五日西坂本致合戰責登山至同晦日致忠畢其子細古山平三大庭六郎見知畢然早爲後證可賜御一見狀候以此旨可有御披露候恐惶謹言



建武三年七月日

藤原基康判

御奉行所

三戶屋文書載

出雲圖三刀屋鄉因幡國玉出保等地頭諏方部三郎入道信惠申六月晦日御合戰之時最前馳向竹田河原討捕御敵和田四郎若黨原四郎五郎光忠被切左手畢彼是御實檢之上者預御證判可備向後龜鏡之由存候以此旨可有御披露候哉恐惶謹言

建武三年七月日

沙門信惠

進上 御奉行所

天野文書載

天野周防土用王丸代同安藝八郎景光申勢多合戰事親父七郎左衛門尉經顯屬于當御手馳向最前去自正月一日至于同十一日連日致合戰堅固每日橋爪於高矢藏抽軍忠之條 五郎入道殿御見知了其上於軍

陳無其隱上者賜御證判爲備後證恐々言上如件

建武三事七月日

承了



2  
85







2  
85

尊氏將軍記

卷十一 建武三年三月

卷十二 起建武三年四月  
盡五月

卷十三 建武三年六月

卷十四 建武三年七月

館書圖京東

冊號架函類門

後鑑

三